明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四卷　第七號

明治三十九年七月一日發行

Dai 4 Kan.　**KATEI ZASSHI**　Dai 7 Gō.

由分社
東京市麹町區元園町壹丁目廿七番地


クラブ洗粉
CLUB WASHING POWDER
最も善良なる
トイレットとして
愛用せらる
此のクラブ洗粉をクリモラとミルク及び卵と
舶来石鹸の貴重なる四原料のポーダーを以て
謹製せられたり
帝國化粧品倶樂部
總代理店 中山太陽堂
神戸本店
大阪支店

第五回內國勸業博覽會銅牌及褒賞狀受領

登録商標

壽美禮
おしろい

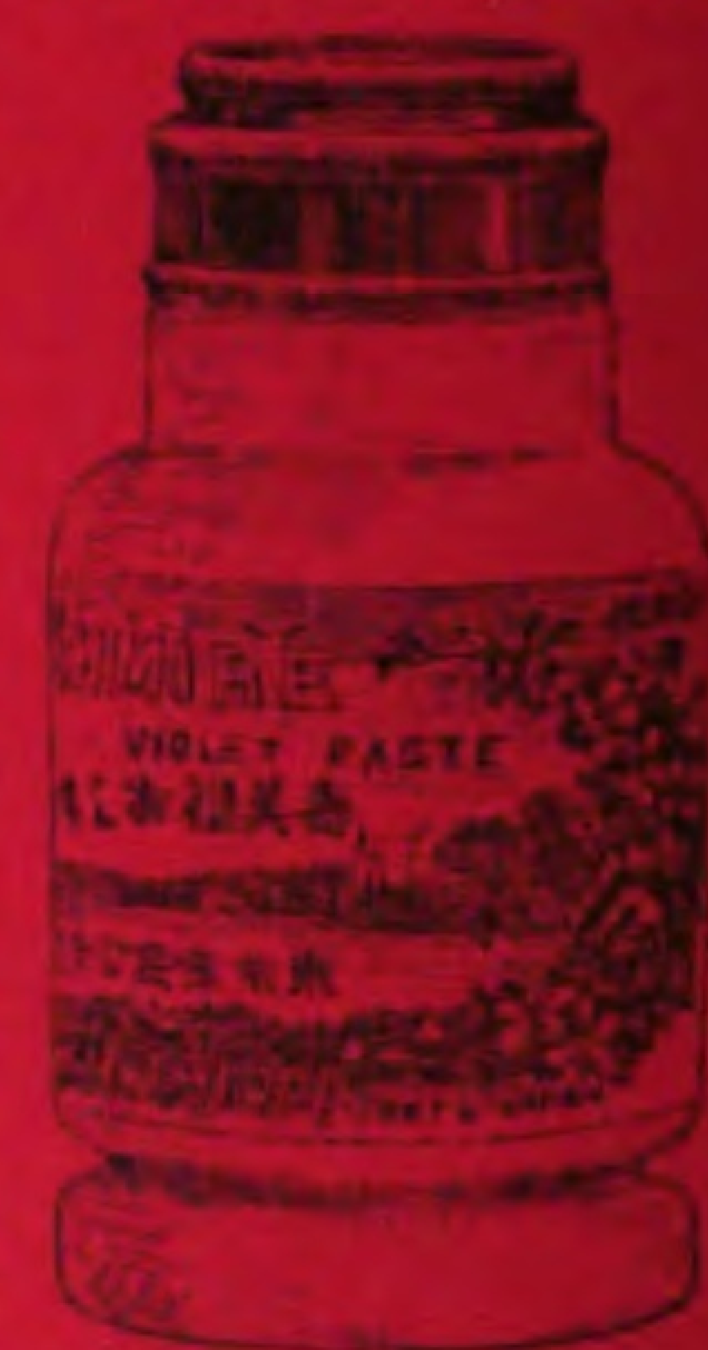
五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ウワイオレット練製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい●

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成蹟液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨て衛生上生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり





錫栓附乳白硝子壜入

ヴワイオレット水製

ねり製　定價（大壜 二十錢　小壜 十二錢）
水製　定價（大壜 二十五錢　中壜 十五錢　小壜 十錢）

●西洋洗滌劑壽美禮あらい粉の特性

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれは朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

●常に髪洗ひに用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜす又半襟ハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を染白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶帶ひ　大袋入　二錢
鑵詰　六錢五厘　袋入　壹錢

登録商標
西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE.
Washing Powder
壽美禮あらい粉



製造本舖
東京東兩國
元町兩國橋際
壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り


御用 諸學校
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Uraiimbo-cho
KANDA, TOKYO
SA
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
改良ロンテニス
二重枠ラケット一組
一號品 一二、五〇〇
二號品 一一、〇〇〇
三號品 八、八〇〇
四號品 七、四〇〇
五號品 六、七〇〇
六號品 五、七〇〇
七號小學用 四、七〇〇
八號婦人用 六、〇〇〇
九號婦人用 七、〇〇〇
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
電本 484
ピンポン室内テニス
一號 一箱 一、二二〇
二號 同 一、五〇〇
三號 同 一、六八〇
四號 同 一、八三〇
號外 同 〇、八八〇
改良テニスネット
一號 一張 四間半 一、七五
二號 一張 五間半 一、二五
三號 一張 六間 一、四五
四號 一張 七間 二、九五
ゴム入フートボール
二號 一個 四、〇〇〇
三號 同 四、五〇〇
四號 同 五、〇〇〇
五號 同 五、五〇〇
六號 同 六、〇〇〇
七號 同 六、五〇〇
八號 同 七、〇〇〇
體操遊戲器械一切
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四百八十四

ローヤル水ハ

最モ高等ナル最モ進歩セル最モ名譽アル化粧水ナリ

定價 拾錢 拾五錢 廿五錢

ローヤル白粉ハ

最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ

定價 拾錢 拾五錢 五拾錢

東京銀座壹丁目

つやぶきん

發賣元 佐々木商店



家庭雜誌

第四卷第七號

明治三十九年七月一日發行

棗と秋海棠

彦）

△僕の家に小猫が一疋居る。名はナツメといふ。或人は之をナツメ先生と呼ぶ。又或人は之を金之助とも呼ぶ。そこで聞く者、或は誤まり傳へて曰く「あれは有名なる「我輩は猫である」の著者夏目漱石氏の名を冒したものであらう」と。是は如何にも人に信ぜられ易き解釋であるが、然しそう認定せられてしまつては、僕が夏目君に對して甚だ失禮に當るから、聊か茲に辯解を試みる。何もナツメと云つたからとて、必ずしも夏目といふ漢字を之に充てなければならぬ事はない。諸君は棗といふ字を御存じでせう。あの棗の實の形は實に可愛らしいものである。其の可愛らしい趣味を取つて茶入の器にナツメといふ名の付けてあることも、諸君は善く御存じでせう。さすれば今僕の家の猫にナツメと命名した所で、何も別に不思議は無い筈である。

△僕の家の小庭に秋海棠がある。秋海棠といふ奴は其花に趣きがあるばかりでなく、あの一方に傾いた樣な大きな葉に「素襖の片袖いかめしく」といふ樣な趣きがあつて甚だ面白い。

磯谷家の最後

西村渚山

磯谷一家の生活は其後も益々華やかで、收入は増加する。費額は膨脹する。質素より華美に進み、華美より豪奢に進んだ。磯谷醫院の微々たりし其昔を知るものは、皆な一大成功として彼等夫妻の幸運を羨まぬはない。併し、高尚なる精神は必ずしも榮華の中に宿るものでないことを氣付いた人は一人もなかつた。

數子の此頃の考へは、貴夫人と家妻とを同時に兼ねることを出來難い相談だと思つて居た。彼女の仕事は昨今知合つたばかりの歴々の奥様方を知己として、日夜訪問や會合に愉快な時間を費すことであつた。一方に於て、正雄は又壯麗なる邸宅を買求めたが、其場所柄は第一流であり、それに豫てから親交して居る村井家の本邸が丁度其隣に接して居るので、兩人は一層これを以て誇りとして居た。『自分達は世間から何程羨ましく思はれて居る事だらう』――即ちこれであつた。

更に、衣裝に就いて云つても、數子は村井夫人に比べて、優るとも劣ることは決してなかつた。朝になると、數子は訪問客を迎へる爲めに、念入りの化粧をなし、高價な裝飾品を輝かせるのが常であつたが、訪れる人は大抵一種の好奇心に驅られて來るのが多いらしい。

今日も數子は正午になる迄に早や四五人の客を受け、やつと自分の部屋へと戻つて來ると、久振りに例の叔父が顔を見せたのである。

『おゝ、叔父さんですか。』

數子は迷惑に思つたけれど、強いて其色を顔に出さず、却つて嬉しげに聲を掛ける。

『立派な座敷だなあ。丸で御殿にでも居る樣な心地だ。』

叔父の言葉の裏には無論不滿の意味が含まれて居る。數子はこれを受けて、

『今迄の家は狹くつて仕方がなかつたのですもの。子供も段々成人しましたし……』

『ほゝう、前の家では子供達が住み切れないと云ふの

かな。して見ると、此所の子供達は皆な人並外れて大きくなければならぬ筈だ。」

「あら、叔父さん。だつてねえ、餘り彼の住居ぢや世間に對して恥しいのですもの。」

老人は此時數子の顏を凝然見詰めて、

「一體幾何出して此邸宅を買つたのだい。」

「幾何ですつて？ さうですねえ。あの……」

「それが是非共聞かしい貰ひたい。」

流石に言葉がない。顏を赧めて伏目になつて居たが、稍あつて數子は最も微かなる聲で、

「叔父さんは御存知ないのよ。正雄は先達「株」で大變成功したのですもの。近頃ではもう藥代や診察料位をあてにはして居ませんの。上流社會の方のやうな生活をして、家内のものにも相當の快樂をさせたいと云ふのが、正雄の理想なのよ。」

「上流社會の方のやうな暮し？、まあ何と云ふ考だらう。恐ろしいことく\。もうく\私はお前の顏を見るのも厭だ。私の育てた數子は其樣な腐つた心を持つて居なかつた積りだ。私は歸るから。」

叔父は斯う云ひ捨てゝ、遁げるやうに家を出た。頓て、正雄が歸宅すると、數子は常になく萎れ返つて、物憂相なその姿。事情を聞けば右の始末なので、

「又かい。叔父貴は此頃馬鹿に頑固な人になつたよ。でなきや、愚痴ばかりこぼすのだもの。遣切れたものぢやない。」と、頻りに慰めて見たけれど、數子の良心は平かに戻らない。『妾は氣を利かして叔父さんにご馳走を食べさせれば善かつた。そして馬車で送り届けてあげれば善かつた。何故斯うと氣が附かなかつたのであらう。』と、獨り心に思つて殘念がつて居る。だが、可笑しいのは其の思ひ付で、萬事阿諛と僞善と、物質慾の滿足とに慣らされて居る身は、饗應以上、馬車以上の考へが出ぬのであつた。

其夕、數子はある盛大な夜會に臨んだ。彼女は年齡尙ほ若く、美しき容貌を失はずに居る。華麗な飾付、清麗な人、彼女はもう殆んど醉へるが如くに數番を跳り、夫と共に宅へ戻つたのは彼此一時を過ぎで居た。

兩人は馬車を下りて部屋に入らうとすると、女中の一人が慌しく驅付けて來て、叔父なる人の危篤を報じたのである、數子は仰天せぬ譯には行かぬ。

『えッ、叔父さんが、今朝彼樣に健康であつたのに……』

正雄は時計を見た。

『一時半だ。どうだらう。私も行つたものだらうか。』

『無論だわ。さあ一所に行きませう。』

叔父の住居は世の中から忘られた場末の町にある。馬車が着いたので、數子は轉がるやうに戸口に進み、トン〲と案内を乞ふと、直ぐに一人の見慣れぬ婦人が顯はれた。

『叔父さんはどうですか。』

『到頭亡なりました。』

兩人は戸の中に駈込んだ。婦人の言葉は無論眞實であつた。尊き老人は安々と床に横り、永久の眠に就いて居るのである。此瞬間、悲哀の念と悔恨の情とは、數子の胸を破るが如くに突いた。遺言書を開いて見る

と、僅少乍ら財産は擧げてこれを數子の子供達に遺すと書いてある。その終りに、『現在の所では、數子が余の遺産に用があらうとは思はれぬ。去り乍ら、他日境遇の變化―有爲轉變は世の常である。若し他人の助力を乞はねばならぬ時節が來た時には、此遺産は何時でも彼女の爲に役立つであらう。』とあり、尙は渡邊と云ふ牧師が其保管人として記名されてある。

『まあ、何と云ふ親切なんでせう、叔父さんは。妾は罰が當りはせんかと思ひますわ。』

世に人の死に依て敎へられる程効果のある敎訓はない。數子の全身を流れる血液には「痛恨」の色を帶びて居たであらう。けれど、正雄には此處置が面白く思はれない。

『私等の子供に遺して呉れる財産に、保管人の必要が何處にあるだらう。』

數子は正雄の疑惑を解かうとして、

『渡邊さんは叔父さんの古い親友でして、正直な正しい方なのですよ。』

それにも拘らず、正雄には終に納得が出來ずに了つた、

其後の事であつた。ある日渡邊は磯谷家を訪れて、數子に向ひ、

「今後は親戚同樣に致さねばならぬのです。でないと、叔父の意思を無にするやうで宜しくない。就ては明日の午後、お子達を悉皆私の宅へよこして貰ひたいのですが如何でせう。」と云つた。數子には固より拒む勇氣がない。後にて正雄に相談すると、

「仕方がない、行かなければならぬだらう。だが、其樣なことはもう年に一度位にして置いて貰ひたい。自家からの返禮は來年の明日にして置かう。」

飽く迄も冷淡なものである。併し其翌日には、襟野と云つて、來年はもう交際社會へ出るべき年齡の總領娘に、二人の弟を連れさせて渡邊へ遣はした。固より貧乏な牧師、住居も汚なければ御馳走もなく、それを我家の明い食堂に比べたならば、全く雲泥の相異である。けれど、子供達は主人夫婦の心底から出る誠と愛

の光を存分に浴びて、可也有益に時間を過したらしい。子供達は其後も月に一度宛位牧師の家に遊びに行き、愉快に半日を費すことがあつたが、引換ねて正雄と數子とは、殆んど彼と絕緣の姿で、門口を通つても寄つて見やうとはしなかつた。

次の冬が來た。愈々襟野の時代が來た譯である。ある朝數子は嫣然し乍ら娘を傍近く寄せて、

「襟野さん。母樣は父樣と相談をしたのだがねえ。いよ／＼十一月の一日に、お前の夜會を催ほすことになりましたよ。尤も、それ迄にはまだ二週間もあるのだから、充分用意も出來やうけれど、大體の献立丈は作つて置きたいと思つて居るの。」

と云つて、先づ襟野にペンを取らせ、招待する人の名を「いろは」別に筆記させた。襟野は母親の命令に背かうとはせぬけれど、何處となく進まぬ樣が見えるのである。

「襟野さん、お前はどうしてさうなのだらう。妾達が此樣に熱心になつて焦心つて居るのに、肝腎の本人が

恐ろしく冷淡なのだもの。」

「だつて母さん、渡邊の玉雄さんが病氣なのぢやありませんか。」

襟野はハンケチで目を抑えた。

「はあ。病氣ですよ。それがどうしたの。今始つた事ではあるまいし。」

「だけれども、屹度夜會の晩あたり、死んでしまふだらうと思つてよ。」

「かまふ事はありませんよ。仕方がないぢやありませんか。」

「それでも叔父さんの……」

「宜しいよ、彼の人達とは世間が違ひますから。」

此樣な會話を交し乍ら、兎に角用事も出來上り、數日の後、更めてカードは其等の人々に對して發せられた。

さて、其前日となると、襟野の新調の夜會着が到着する。若き彼女の眸は流石に輝かずには居られない。數子は一倍喜んで、

「何て立派に出來たのだらう。嬉しいでせう。どれ、母樣は一寸父樣の所へ行つて來やう。今日お前の耳環を買つて來て下さつた筈だから。」

云つて、階下の一室に這入らうとする途端、俄に甲高な聲が其中から洩れて出た。不思議に思つて、其儘立止つて耳を澄ますと、今度は正雄の沈んだ聲で、

「なに、決して大した迷惑を掛けるのではないです。只四五日間です。四五日後には必ず始末を着けます。」

「いや、處がもう此上お待ち申す譯には行かぬのです。」

と又聞える。數子の胸には同時に強き響きを傳へたのである。否な、惡魔の爪尖にでも掛つたやうな心地がしたのである、客が去つた後、再び其所に行つて見ると、戸がきつちりと閉されて居る。引手に手を掛けた儘

「おゝ、入らしつたの。」

「何の用か。」

言葉付が粗いのみか、調子に怒りを帶びて居る。

「あの襟野の耳環ですがねえ。貴郎買つて來て遣つて

下すつて？」
正雄は一寸舌打して、
「其樣な下らぬ用事か。うるさいなア。」
數子は夫の只ならぬ樣子を直に讀み得たのである。
「貴郎どうかして？今來て居たお客は誰でした？」
「此っ方の事だ。お前達の知つた事ではない。」
一時口を噤んで差控へて居たけれど、やがて愛情に滿ち〴〵た聲で、
「何故今日はさうなの？貴郎の事件なら矢張それが妾の事件でもあるぢやありませんか。若し變つた事があるならば、妾はどうしてもそれを知りたいことよ。」
柔かな言葉は怒りを遠げる、とは能く云つた諺である。正雄は數子の美しい忍耐の力に感激して、
「いや數さん、私が誤つて居たよ。だが、若しお前に聞かせて善い事なら、何故秘密にして居やう。今度の事は口に出して云はぬのが却てお前に親切なんだよ。」
「では何か不幸な事でもあつて？。」
「さう。いや、兎に角夜會と云ふ恐ろしい晩が濟む迄待つて貰はう。」
云ひ〳〵ポケットから小さな匣を取出して、
「さあ、これを襟野に遣つておくれ。そして──此事に就いて何も言はずに置くのだよ。」
「だつて、それは餘りではありませんか。此儘にして夜會の濟む迄待てなんて……」
「一口に言へば、磯谷家──の破滅だよ。いや、まあ悉しい事は後で善い、早く準備をして來なさい。」
何と云ふ面白からぬ日であらう。數子は夜會の見合せを建言したけれど、正雄は終に承諾しなかつた。さて、愈々當夜が來ると、襟野は新調の晴着に天女の如き粧ひ。幸に輝いた其容貌、情を含んだ碧の其眼。ネツクレース、耳環、父親の最後の贈物に光りを增して、如何にも派出な社交場裡の初花。年頃の娘持つ母の誇りはこれである。
「奥樣、お孃樣はまるで皇后樣のやうにお見えなさいますねえ。」
とは、蠟燭を高く支へて襟野の足元へ照らし行く小間

使の讃辭。何かは知らず數子はぶる〳〵と打慄えた。十數番の舞踏、滯なく濟み、雲の如き紳士と淑女は口々に爭つて、優美で華麗な襟野の容姿を稱揚した。或人は當季節中の美人であらうと迄評した。頓て食事も終り、客は皆な退散。襟野は笑みを含んで寢室に這入る。最後に殘つたのは正雄と數子の二人であつた。華やかなる舞踏の後の大廣間に、憂ひを含んだ夫婦の姿の如何に淋しきよ。翌朝になつて、正雄は終に包み切れず、事情其儘を數子に告げた。前夜彼が破滅と云つたのは形容でなく、實際であつた。主因は「株」の激動に依つてゞあつたが、同時に數年來の贅澤生活が、借金となり、遣繰となつて、思はぬ所に煩ひをなしたのは、爭はれぬ事實である。今はもう磯谷醫院も全治の見込がない。樣子を薄々聞知つた世人は、種々なる評判を立てゝ、朝餉夕餉の好話題となし、打つて變つた冷淡な態度、誰一人彼の失敗に同情を寄せるものとてはない。其中に在つて只一人思ひ掛けない渡邊牧師が、一家沒落の際に當つて賴しい味方として顯はれた。

正雄は差詰生活の方法を變へねばならなかつた。と云ふよりは、裏店住居に急轉直下するより外に道がないのである。この苦境に於て、牧師の古き住居も寧ろ

磯谷に取つては美しき孤兒院であつた。一時不滿を抱いた叔父の遺產一件は、此時に及んで始めて其効果を語るのである。

磯谷一家は渡邊牧師の斡旋と、亡き叔父の親切なる遺品とに依つて、又も都の一隅に小さき家を借り受けた。數子にはそれが北極から南端へ轉じたやうな心地がするのである。殆んど生活の有樣が一變して居た。獨り生活の有樣ばかりでない。兩人の精神が再び新鮮の空氣に觸れると同時に、今度は質素と勞働の美風が眞實に味ひ得られ、茲に初めて第二の堅固なる主義を建設する事が出來たのである。

可憐なる數子！　今や彼女の日々の仕事は隨分辛きものとなつた。何故とならば、それは修業がまだ不足であつたから——我儘、私慾、驕慢、羨望、此等を敵として心靈の聖き宮居を守るには、また〳〵其力が弱かつたのである。

是より后、磯谷一家は初めて覺醒の新生涯に入る事であらう。

（附記）此分原書に於ては非常に長く、略ぼ三分の二を省略して、僅に意味のみを傳へし箇所あり。尙ほこの一篇を初めて讀み玉ふ方に對しては更に前篇たるべき、第三卷の十一、十二兩號を併讀し玉はん事をおすゝめ致すべし。

菜食論（一）

加藤時次郎

「家庭雜誌」は余が家庭に缺くべからざる雜誌の一で、常に愛讀してゐる。就中、堺兄幸德兄をはじめ、寄書家の大石君等の菜食論は、余の最も深き注意を拂つたものであるが、菜食主義を學術上より論ずるの點に至つては、遺憾ながら滿足が出來なかつた。先日、偶々堺兄に面會した折、談この事に及んで、道德的見地よりするのみならず、科學的方面より論究せば、更に興趣の深きものあるであらうと云つたが導火で、隗より始むることゝなつたのである。

本論は伯林大學助敎授アルベルト、アルプ氏著「菜食的滋養論」フェルディナント、ヒュッペ氏著「模範的菜養主義」及びバーゼル大學生理化學敎授ブンゲ氏著「菜養主義」等を抄譯し、之に自己の所見を加へたので、嘗て地方の某雜誌に最初の一小部分を掲載し、同誌の廢刊後、篋底に藏して置いたのを、今回更に訂正して本誌に掲ぐることとしたのである。元より操觚者ならぬ余の、文辭に嫻はぬ點は、豫め讀者の諒察を請うて置く。

▲緒　論

文明と道德との相伴はざることは、夙に識者の道破せるところであつて、所謂文明なるものゝ進步すればする丈、吾人々類の生活機關は非常なる壓迫を加へられるので、之が爲めに如何なる階級に屬する者も總て競爭的に幸福なる生活を得んとして、各々心を勞するのである。で、此競爭を形づくり、幸福なる生活を得んとする勢力家、即ち所謂資本家は、文明の利器を應用して多數の下級人民より其生活力を奪ひ取つて、益益自己の榮譽と幸福とを增進せしめるのである。此に因つて社會は漸次複雜となり、下級人民は資本家によつて生活せんとするも、所謂文明の進步は工業農業商業等の發達を促すとともに、愈々勞働者を使役するの要を減せしむるを以て、勞働者の困難は茲に名狀すべからざる有樣となるのである。是に於て勞働者の生活

は社會の一大問題となり、經世家の心を痛めつゝあるので、或は社會政策とか、或は社會主義とかの立脚地より、渠等勞働者を其の困難より救濟せんとして、社會の經濟問題に種々の議論を生じ、今や革命の機運に近づかんとして居るのである。

飜つて古の人類生活の狀態を觀るに、今日の如く爾く道德の地に墜ちたるものに非ず、其生活の容易なる爲め、文明の進步せざると反比例に、德義の觀念は十分に發達し、衣食足りて自ら禮節を知るものがあつたのである。然るに文明の進步し發達して居ると稱せらるる今日に於ては、多數の人民は云ふまでもなく、道德家といはれ、宗敎家と呼ばれ、敎育家と稱へらるゝ者さへも、多くは德義の假面を被つて世人を瞞着するに努めるのみで、吾人の心服に値する者は殆んど無いのである。是れ畢竟するに、人類の生活程度が非常に高まれると、且つは複雜になれるが爲めで、德義の觀念を涵養するに先だち、自己の幸福なる生活を得んとするに要する智識を練るの必要に迫らるゝが爲めに外ならぬのである。若し吾人の生活にして複雜ならずば、非常なる腦力を費してまでも、譎詐、奸佞、陷擠等の不德を敢てする者は少くなるであらう。換言すれば、生活易ければ從つて道德心は十分に發揮せられ、假令、道德機關は十分に使用せられずとも、敎育機關は整はずとも、自ら道德は發達するのである。彼の山間僻陬の地に在る所の、目に一丁字なき翁媼を以て、肥馬輕裘の貴公子に比し、其德義の厚薄、天壤も啻ならざるを見たならば、蓋し思ひ半ばに過ぐる者あるであらう。

道德と生活問題との間には、其の根底に於て離るべからざる關係を有すること前述の如くなるにも係はらず、今の道德家、宗敎家、敎育家等は、頻りに形式の道德を唱道し、外觀美を主張し、以て一時を糊塗せんとするのみにて、多數人民の困苦を根本より救濟せんとする者無し。さりとて、又、今の社會に對つて根本的改良を加へんと企つる者があつても、其處に種々の障碍橫たはりて、容易に之を成すことの出來得ぬのは、實に長大息に堪へない次第である。

予は醫師の本分として、醫學上の見地より如何にせば人類の生活を單純ならしめ、容易ならしめ得るかを講究し、以て頽敗せる道德をして自然復活の途に就かしめんとする希望の下に、現今世界の學者によつて種々論議せられつゝある菜食論を研究して居るのである菜食は人類の營養といふ點に就ては十分ならず、從つて激烈なる競爭場裡に立つて虛名を貪り、不義の利を獲んとして狂奔する者には、生理上之を應用すること難しと雖も、清淨なる自然の懷に眠り、和暄なる日光に浴しつゝ田園生活でもしやうとする者に取つては、決して害なきのみならず、之を勸むるの價値あるを認むるが故に、菜食論の起因、發達、又之に就ての生理說等を、號を追うて本誌に掲ぐることゝした。若し之に因て複雜なる生活より其身を脫し、靜に天を樂んで自然の道德を發揮する者があるならば、其は唯予一人の幸福のみではないのである。

▲誘導篇

菜食の奬勵に就ては、世人より兎角の批評を受け、種々なる攻擊を受けては居るが、其批評も攻擊も、未だ全く菜食を社會の外に消滅せしめることは出來ぬ。

ドクトル、ブンゲー氏が或る時の演說に、

考へるより嗤ふ方易し

と言へる奇警の語を發したることがある。實にブンゲー氏の言の如く、或る新奇なる學說等の世に公にせらるゝや、綿密なる研究と周到なる調査とを盡して、其學說の果して眞理に適へるや否やを論ずる者は少く、多くは之を嘲笑して一概に排斥して了ふのである。是等は到底學術に不忠實なるの毀を免るゝことは出來ないものである。

偶々、ブンゲー氏の語より聯想したることがある。我が國最高の學府たる帝國大學の堂々たる博士達が、學問の獨立を口にして學界に波瀾を起した事は、讀者諸君の知らるゝ事實であるが、その學問の獨立の爲めには自己の官職を捨てゝ顧みざると弊履の如き？博士達の中には、未だ社會は主義に關する著書の一頁をだに繙いた事もないのに係らず、無暗に之を攻擊し之を

排斥して居るものもある。社會主義の實行は別問題としても、之を攻擊するには攻擊するだけの理由がなくてはならぬ。之を排斥するには排斥するだけの根據がなくてはならぬ。然るを渠等は學問の獨立を叫ぶ口の下から、食はず嫌ひに社會主義を厭忌し、學問の獨立を妨げて居る、天下復此の如き矛盾があらうか。

閑話休題、菜食論の眼目とも言ふ可きものに二つある、第一は、菜食主義を科學的に研究する事。第二は、此學問の起因に就て興味をもつて研究すること、即ち歷史的に研究するとである。然るに世の菜食家は此の二眼目たる科學的研究及び歷史的研究の乏しき爲め、菜食論に關する學理の根本を調査する知識なく、從つてこれが理由を説明するに苦んで居る。換言すれば、學者も半學者も、或は醫師と雖も、此の研究が、如何なる範圍に於て、如何に多數の人民の上に影響を及ぼされたるかは考へ居らなかつたのである、例へば菜食主義を研究する一部の人士が病に罹りて醫師の治療を受くるもなほその治せざる者あるを見て、之に勸むる

に菜食を以てして、試驗の材料となしたる事はあり、然れども之れを學理に照し科學的に應用して、菜食の効用を研究せんとする材料は甚だ乏しいのである。又菜食主義の學理の側に就て見るも、醫學上の見地より菜食の原因を研究したる者も亦甚だ稀であるから、上に述べたる如くブンゲー氏が歎息の語を漏らしたのも實に理至極である。畢竟するに、菜食論を毀る者も、奬勵する者も與に菜食に就ての研究が乏しいのであるから、吾人は深くブンゲー氏の語を翫味し、興味を有して之を研究せねばならぬのである。

從來、菜食家の著した書を見るに、正確にして研究の用に供せらるゝものは少く、その多くは一枚刷のものか、然らざるも片々たる數枚の小冊子にして、學者の一讀に値する者は之を見出すに苦む程で、其論ずる所の、菜食主義者の運動の基礎及び立論なるものは、非菜食主義者に對する科學的の論據を捉へ來つて云々するに過ぎないのである。世人が菜食的理想を翫味、判別し能はざるは、その理想の僞りなるにも因らうが、

畢竟は渠等が科學の研究に浴せざる爲である。なほ世人の一般が此の研究を等閑に附するのは、さまで怪む可き事でもないが、醫學者が常に菜食主義の傳道を耳にし、若くは此の主義の著書を目にしながら、之が研究を怠れるは、頗る笑ふ可き事であらうと思ふ。

然るに近世科學的に英名を轟かしたるブンゲー氏及びヒユッペ氏及アルブー氏は、最も價値ある材料として此主義の研究に熱注し、大に此の問題の解決に力を盡した。之が爲めに此の研究が生きたる事實運動として菜食主義の上に爭ふ可からざる成績を高め、民衆の多くも亦從つて之が研究に耳を傾くるやうになつた。

元來、菜食主義の運動が人間内容の原因に興味あるものとすれば、學問的穿鑿を外に見ることは到底不可能のことで、最も眞面目に之を研究せねばならぬものである。斯く眞面目なる問題として之を研究してこそ、始めて茲に、あらゆる時代を通じて世界的全知識として稱揚せらるゝピタゴラスよりトルストイに至る迄の理想の價値を欺かぬと言ひ得るのであらう。

非菜食主義者は菜食の教を以て學問的に興味ある問題ともせず、人生の營養問題に意義あるものともせず、又國民の經濟及び社會の衛生に就て實際的意義を有せるものとも爲さず、唯、埃及の古代より今日に至るまでの生活上に就て、人類の道德及び健康に對する迷想と缺陷とが菜食をして爾く發達せしめたるのみとしてゐる。乍然、菜食生活法は渠等非菜食主義者が言ふ如く、唯無學者が個人的迷想を以て之を信ずるのみならず、その効用たる最も廣く、地理學、氣候學、經濟學、社會學等に關係を有し、小にしては個人、大にしては一國民衆に影響を來たし、以て全世界の人類に及ぼすものである。されば菜食主義の研究は單に醫學的の觀察をのみ以て成し得るものでなく、是非とも其周圍の關係を詳にしなくてはならぬ。獨り菜食主義の研究にのみ限らず、苟も醫師にして國民の營養問題を研究しやうとするには、必らずや、國家の經濟、社會の組織等を其範圍に加へて講究せねばならぬのである。

暗汁會の記

蓮葉生

此頃さる團體で左の通りの趣意書が回はり發起人たる牽牛子蝸牛子が熱心に團體中を勸誘した。思付きはよし、場所はよし、時節はよしのよし〳〵盡し、下地は好きなり御意はよしと〆め切つた總計出席會員が十と三名、

趣意書

御同勤中牛込に家居し給ふ方々日に月に加はり現にドテゲン以上にのぼれること誠に盛なりと申すべく候就ては牛の力の強きが如く牛の性の穏かなるが如く強く穏かなる交りを結び牛の角文字曲り文字久しく相睦ばまほしくこそ候へ、來る六月二日うしの日をトし牛込門のそと車力のつらいとかこつなる神樂の坂を上ぼること牛のいばりの十丁ばかり區役所のうしとら赤坂神社のうしろ、牛天神の向ふが岡、清風亭にて牛飲馬食の會を催し候爲隙をうして丶御來

會被下度返す〳〵も敵にうしろをな見せ給ひそ、會費は牛の一とつきに因みて金一圓也時間はうしの刻と致度きは山々なれどそれは不都合ゆへうま後の三時と相定め候也

五月廿四日　牛門暗汁會發起人　牽牛子　蝸牛子

右の回章の名宛の下に思ひ〳〵の書き入れがしてある中に左のやうなのがある

△牛と一杯やりませう大賛成

△牛尾たらん

△うしと見し世ぞ今は戀しきと言ひたさに牛のやうにもう從す（之れはもと牛込の住人今は大久保村に移りしを因緣つけて仲間に引込みたる發起人の手腕）

△牛を馬に乗りかへたる御趣向面白し誓て參會せん

△行くもうし行かざるもうし牛込の牛にひかれて我ももうでん

△二次會があつて留守にも角が生え

△牛乳の配達がきて散會し

△角文字のいろ〳〵こもる暗の汁

何はさて置き牛込連が今度清風亭に於て暗汁會を催すそうだとの噂さが五六十人の團體中に傳はつた同章の余白には「頭數の多いで牛耳とつて居る」などのいたづら書きがしてあると云ふありさま、牛込連は六月二日が待遠いよなどと他區居住の者へ聞こへよがしに云ふので、然らは我々殘りの者は聯合して除牛會を開かうではないかナニ除牛會とは牛込連を排除する意味さと冷かしを云ふ人さへ出來た、

愈六月の二日とはなつた會費の外に各自十錢以內にて煮物の材料を携帶すべき約束で、それを幹事が秘密に受取つて女中に賴んで一とくるめに雜煮をさせる、出來た御馳走を皆で賞翫して其材料の持參人を投票で當つこをする材料の思付きの品評投票をすると云ふが此日の暗汁會の趣旨だ、牛込は赤城神社の裏手小石川の高臺と相對せる高丘、見晴らしのよいことは素晴しいものだ、二時頃よりてんでんに風呂敷の秘密をそつと幹事に渡して何喰はぬ顏にて坐敷にやつてくる三時半にはざつと顏揃ひとはなつた、

座上珍談奇聞湧くが如くであつたが未だ大久保の某君の顏が見えないと云つて居る所へ噂をすれば影とやら調度ひよつくり先生がやつてきた、何か紙包みの材料を幹事に渡してさて力士のやうな肥滿したからだをやら落ちつけて頭かき〳〵僕は實に今日と云ふ今日は困まつて仕舞つた、どうかして物忘れをせぬ工夫はないものか知らんと云ひ出したので皆々其仔細を問ふたれば先生またも頭かき〳〵語つて曰く實は今日のこゝの會だけは本田君が手帳に書いて呉れたので一時になるとすぐ宅を飛び出さうとした、そこへひよつくり村の人が四五人宅にやつてきた之を見た僕はハッと困まつた、實は大久保の住人十數名が月に一同廻り持ちで親睦會を開くのだがそれが調度今日、しかも僕の宅が當番だつたのをすッかり忘れこんで居たので、準備も整はず、それに僕は是非此會に出なくちやならぬのでやッとさる友人に事情を打明けて代り當番を賴み僕は

神樂坂迄きて一寸さる店へ立寄り買物をして店を出る途端に車上から、只今參るのですと僕に挨拶するものがある誰れかと思つて見れば又ギツクリ、失敗つた！此時は實に冷汗を流した、其車上の人と云ふのは此頃上京した僕の鄕友で僕は二三日前神田の寶亭に四時に是非きて下さいと招待狀を出したことがある、それが調度今日の日取だつたのを顏見てから思出したのだ、重ね〳〵の失敗だから大弱りに弱つたがどうも仕方がないから出鱈目に其塲を繕つた一寸一軒急用ができて途寄りをするからどうか先きへ行つて居て下さいと挨拶したまゝこゝまで來たが右の始末だからすぐ引返へして神田へ行かねばならない諸君どうか惡しからず。との長口上、至極眞地目の御當人の陳述も事柄が餘りに滑稽に出來て居るので皆がたまらず吹出して大笑ひとなつた此人の健忘は交友間の愛嬌になつて居る程なので、果ては皆氣の毒がつて神田がすみ次第是非更に此處に立寄つて下さいと挨拶に及んだ大凡此位ひ忘れつぽい人が現時我國に於て古代語學ラテン、ギリシヤ、ヘブライ語にかけては此人に比肩するものがないと云はるゝ語學者、十年間米國の諸大學で獨佛英の文學博言學比較宗教學を研究する傍ら古代語學には一層の力

を入れて八九年正式の研究をなし卒業論文は悉くラテン、ギリシヤの語で認めたと聞いて居る、一體語學は記臆が第一だと云ふに先生の如く健忘の人が先生の如き語學の大家たるは甚珍と云はねばならぬ恐らくは學問の方が一心ながゐかくは世事を忘るのであらうそこで此愛嬌なる滑稽劇が演せられた後直に例の雜煮が運び出されてたん〳〵に賞翫した幹事鹿爪らしく筆取りて材料持參者の投票をして推測と實際との比較成績を披露に及んだ其實際の携帶者携帶品左の如くであつた

（一）ごばう　尺氏
（三）うどん　水野氏
（五）たまご　鈴木氏
（七）そば　重野氏
（九）ぶた　杉田氏
（一一）ねぎ　市野氏
（一三）はす　蓮葉生
（二）かつぶし　山口氏
（四）かまぼこ　村上氏
（六）あぶらげ　八杉氏
（八）つみいれ　織田氏
（一〇）いりこ　本田氏
（一二）にんじん　住野氏

本田市野二氏が幹事であつたが此報告と共に次回幹事を宜して云ふにはうどん、そばは今日の出品中第一と認める、因て褒美として持參人たる水野重野の二氏を次回幹事とすると、衆皆拍手して之を是認し各歸路に付たのは彼此十時であつたろふ、翌日早速幹事から又牛の字讀み込みの面白い報告書が廻つたけれど餘り長くなるから之れでお仕舞ひ、

田園より

久田生

◎去年の花守　久しく本誌でエデンの花守や二葉生の名で、花を作ることを書いた私は、贅澤に云へば轉地療養、實は一種の放浪生活、を駿河の海岸にして居たことは、去夏の本誌に書いた通りであります。けれど放浪といふ不安、病氣といふ苦痛、此の二つを追つ付け退治出來るだらうと、今日迄讀者諸君へ住所を明にせず、遂に或は前住地の加賀に及び『駿河燒津在某村』と云ふ宛、又は出分社へ宛てゝ見舞狀や質問狀を澤山戴きました、御厚情は身にしみて有り難く永く忘れませぬ、返事も大抵は出しましたが、急がぬ質問にはまだお答へせぬのも澤山あります故、それは折りを見てまた致しませう。

◎此放浪の私も五月の本誌で御覧の通り、四月から出て參り、西ヶ原(府下北豐島郡西ヶ原九九)に住んで居ります故、以後質問などはどうぞ此處へ宛てゝ下さるやうに願ひます。

◎女子園藝講習會　此の會主の山崎といふ方と親しくして居りますので、氏の此の話を云ひ出された時「融通のきかぬ會らしい」と云つたら、「去年も婦人農藝講習會といふのをやつたが、二十余名の講習生で少々損を被つた、その代り二十人の婦人に幾分、農藝や園藝といふ自然の智識と趣味と効用とを與へたと思へば、大きに滿足される』といふやうな熱心な眞面目な返事、如何にも普通の講習會と趣きが異つて居り、それに「田園婦人」といふ小さな雜誌を毎月書き、此趣味皷吹に勉めて居られるから、時節柄大に感心し、ツイ云はゞ少し提灯を持つて見る氣になりました。そこで開會は八月一日より。科目は果樹、蔬菜、花卉、園藝的西洋料理、養蠶及養鷄、家庭看護及女禮式などで、此の中一科でも二科でも、又たは皆なでも隨意に講習を受けられ、毎科一日一時間位づゝ一週間か二週間といふ僅かの時間なれば、如何なる多忙な方にも至極便利です。殊に小學校や女子校の女教員諸君や、野菜、果樹の料理を習はうといふ方の爲めに至極よからうと思ひます、なほ詳細は婦人農藝會(牛込東五軒町四一)へ御問合せ下さい。

育兒所感

中尾清太郎

余が『子を得たる時の感』を書したるものは、昨年十月の本誌に掲載したり。余は更に、余が愛兒を鞠育しつゝある間に於いて、余の受けたる教訓、啓發の二三を記さゞるべからざる義務あるを感ずる也。今試みに項別して語り出づべし。

第一　小兒と光明

In the beginning God created the heavens and the earth. And the earth was waste and Void; and darkness was upon the face of the deep: and the Spirit of God moved upon the face of the Waters. And God said, Let there be light: and there was light. And God saw the light, that hat it was good: and God divided the light from the darkness. And God called the light Day, and the darkness he called Night. And there was evening and was morning, one day.

あゝ如何に莊嚴なる光景よ。

『神天と地とを創造れり。地は定形なく曠空くして、

黑暗深淵の面を覆ひ、神の靈、水の面に動きぬ。』然れども若し光なくば如何。光なくば晝なく、晝の美なく、諸の自然、諸の生物なきのみか、惡魔の隱るゝ時も無けむ。

光は暗を破るの力なり。アウロラなり。あらゆるものゝ命なり。惡しき者の驚異なり。善き者の嘆美なり。あゝ光は美しくして愛すべき哉。而して之を慕ふ兒は更に愛すべき哉。

今余が幼兒を光に導かむか。彼は喜び勇みて、ありし位置に止まるべうもあらず。座にあらばアハッ、エヘッ、と叫びて這ひ出し、背にあらば激しく手足を腕きて躍り出し、若し抱きてあらむには、獨り離れて彼方に奔り寄らむとすべし。光は幼兒に取りて、此上なき一個のアットラクションなる哉。譬へば、大人が冬の夜のストオヴを戀ふるよりも甚し。

夫れ光を喜ぶは人の性ならずや。光は善なり。よし光其者は善ならずとも、光は善のシムボルたるを失はざるべし。波斯敎にては、天上にオルムズドと稱する

光明神と、アリマンと稱する暗黒神とありて、常に互に相爭ひつゝあるが、オルムズドの勝ちたる時には善を降し、アリマンの勝ちたる時には惡を降すと信ずとかや。かく信ずる所より、遂に火光崇拜の敎義を作るに至りぬ。あゝ光は貴くして崇むべき哉。而して之を慕ふ兒は更に崇むべき哉。

第二　●●●●●　小兒と活動

睡眠を除いて、小兒に一瞬の休息なし。一刻の懈怠なし。また逡巡なし。躊躇あるなし。唯あるものは猛進のみ。活動のみ。一たび自己が爲さむと決したる前には、如何なる障碍も屑ならず。如何なる迫害も彼の避くる所にあらず。而してこれ偏に人類の固有性を、遺憾なく發露したるに過ぎざるのみ。

夫れ活動なきものは生命なき也。生命なきものは即ち呡ぶ。人天地の間に生を享く。進化の理は當に活動なき能はざる也。

余は小兒の活動を見て、二樣の敎訓を同時に收めた

ることを謂ひ得べし。一は之によりて、過去人類の發達の徑路を目睹したる點に在り。他は之によりて、吾人も斯くあらざるべからずと確信するに至りたる點に在り。而して共にこれ人類の上進に對する大なる警告にして、大なる獎勵ならざるべからず。或科學者は、人類の身體的進化は既に極點に達せりといふ也。然れども吾人は尙進んで、精神的進化を重ねざるべからず。故に吾人の活動は一日も、寸時も、廢すべからざる也。たゞ今日世人の稱道する活動主義は、餘りに物質的に傾きて、餘りに多く肉體的意味を加ふるが如し。余は余の用語なる活動の、より多く内部生活のそれを指すものなるを謂はむと欲する也。

更に活動とは、他語を以つてすれば、事毎に全力を用ゐるの謂ならざるべからず。小事に忠なる如く、大事にも忠なるの謂ならざるべからず。獅子は兎を搏つ時にも、渾身の力を運ぶといふにあらずや。吾人は何事を爲すにも、此段の用意なかるべからざる也。

之を小兒に見よ。手に餘るものを抱くにも、いと小

さき者を掴むにも、均しく全身の全力を罩むるにあらずや。これ豈に吾人の學ぶべき教訓にあらざるか。

先頃獨逸皇帝に謁見したる一紳商は、戯れに帝の傍に在りし一皇子に、自己の時計を玩耍のつもりにて握らせたるに、いつかな離さず。彼は遂に其儘引退りたるが、帝は此紳商を見送るとき、『ホオヘンゾルレルン家の者は、一度握りたるものは決して離さぬがならひなり』と仰せられしとぞ。洵に獨逸皇帝にふさはしき物語なるが、併し小兒の握力の強きは、進化論者のいふが如く、祖先の動物的遺傳にして、何ぞ必ずしもホオヘンゾルレルン家の皇子たらずとも、余が家の破邪坊（余が愛兒は破邪坊と稱す。）とても、更にかはりはなき也。唯余は小兒が擒るにも縱つにも、常に一生懸命となる所に、人生活動の極意を看出ださむとするもの也。

第三　小兒と自由

寢るにも、起きるにも、乳を吞むにも、調戯をするにも、小兒は自由を愛す。少しにても傍より其自由を

牽制するが如きことあらば、忽ち反抗し、倏ち絶叫し、自己の思ふ通りを成さずんば已まず。蓋しこれ人間の天性なり。ルウソオが『エミイル』は、余が小兒を愛育するに、多大の注意を與へくれたるものなるが、其書の劈頭には、『何物も神の手より出でし時には、一として可ならざるものなけれども、人の手に入りて悉く損はる。故に自然に還れ』と喝破せり。余は余の小兒を、小兒自身の欲するまゝに育てむとする者也。世間若し自由を妨げられて忍耐する小兒あらば、其小兒は既に天然を損はれしものと云はざるべからず。余は偶々余の小兒の保姆が、誤りて小兒の自由行動を妨げたる時、小兒の大叫喚を聞くを以つて大愉快となす。然る後に余は徐々として保姆に說く所ある也。

かゝれば余は余の小兒に對して、あらゆる自由を認許せり。また將來に於いても、余は余の小兒を絶對的に叱呵せざらむことを覺悟せり。そは小兒が如何なる事を爲したりとも、既に之を爲したる後に叱呵するは、げに愚なるわざと思へば也。凡そ爲すべき事を爲さし

め、為すべからざる事を為さざらしむるの習慣は、絕對的自由を認許して、自然のまゝに打任せたる、寬大なる教育の理より贏ち來たるべしと信せらるゝ也。此點に於いても、余は全然ルウソオに從ふ者也。

余は余の愛兒が、かく自然の理に生ひ立ちて、極めて自由なる、毫末も干渉てふことを知らざる、遊び好きなる、樂んで飽くことを知らざる、無邪氣なる少年とならむことを期する者也。而して若し余等父母に邪あらば、また——余等の國家に非曲あらば、飽くまで反抗し、飽くまで絕叫し、世の新謂不孝不忠の惡名を甘受する底の、偉大なる見識と、鞏固なる信念と、道德的勇氣と、革命的猛烈とを有するに至らむことを庶幾する者也。

田園雜咏

赤羽生

△紺青の雲うすれ行く夕空に、雪兒高き乘鞍が嶽

△山々は夕の靄につゝまれて、暮色落ち來ぬ、遠近の村。

鴉の子

上司小劍

白金の明治學院の傍の森の中に、大きな樫の木がある。

其の樫の木のテッペンに、鴉が巢をつくつた。

* * * * *

昔し支那人は「反哺の孝あり」なぞと云つて、鴉を譽めたが、日本人は由來鴉を賤しい鳥として輕蔑してゐる。餌を探しに出た序に、一寸人の家の垣根へとまつても、五歲か、六歲の子供までが「母ちやん鴉が來たよ、厭やな鳥ね」と、棒切れを振りあげて追ひ立てる。

但馬の國の何んとか云ふ村の松の木に、丹頂の鶴が巢をつくつたと云つて、世に阿諛する新聞、雜誌は、御丁寧に寫眞版まで揭げて「國家の瑞相」なぞと書き立てたが、白金の樫の木に鴉が巢をつくつても、新聞、雜誌には一行も書いて吳れない。

しかし鴉は、人間と云ふものゝ、よく〳〵自分に冷酷であると云ふことを知つてゐる。羽毛から、嘴から足

の先きまで、全身眞ッ黒な、些少の裝飾も無い服裝をした彼れは、其の鋭い、冷な眼を光せて、絶えず人の世を睨んでゐる。彼れは常に人間に憎まれながら、常に人間を冷笑してゐる。彼れが庭の木にとまつて、人間の家庭と云ふものを觀察しつゝ、隙があつたら牛肉の一片でも盜んでやらうと窺つてる矢先に、おさんが物干竿を手にするのを見れば、竿の方向の何れを指すや分らない中に、彼れは早くも『ハヽア、乃公を突きに來るのだな』と合點しつゝ、竿の長さと、木の高さと、おさんの身の長とを、逸早く目分量に測量して、竿の長さとおさんの長さとを加ふるも、己れのとまつてゐる枝の足元までは、竿が屆かないと見定めた上は、直ぐに逃げないで、上の枝へ飛んだり、橫の枝へ移つたり、一寸ばかりおさんを焦らして、おさんが竿を投げ捨て、小石を手にして、投げ付くるに及び、始めて、『カア〳〵』の痛罵を、おさんの頭上に殘して飛び去るのである。

鶴は仙禽と云つて、人間に重んせられ、鶯は『法華經』

と啼くと云つて、人間に賞められてゐるが、鴉は只厭やな鳥として、人間に賤められ、其の啼聲までも、不吉の兆として、御幣擔ぎの人間に眉を顰めさせてゐる。其の代りに鴉は、鶴のやうに、動物園の鐵の網の中に押しこめられることは無く、仙禽ともあるべきものが、一杯一錢の餌に舌皷を打つて喜ぶと云ふ淺間しさを演ずることも無く、また鶯のやうに、方一尺にも足らぬ竹の籠に入れられて、人間社會の寄生蟲の、其のまた寄生蟲の、孃樣や坊ちやまなぞ云ふものゝ玩弄品にされることも無く、實に獨立獨行、世界を我が物として暮らしてゐる。見給へ百獸の王と稱せらるゝライオンでも、鳥類の大將軍と云はるゝ鷲でも、人間に捕はれて、動物園に生き恥をさらしてゐるでは無いか、それを唯一つ鴉樣だけが、人間の觀せ物にならぬのを大なる傲りとして、何を人間風情がと云ふ面構へで、動物園の松の木の上から、捕はれたる淺間しの鳥獸や、それを觀に來る人間の馬鹿顔やを見おろして、時々小便の雫を彼等の頭の上にお見舞申すと、智慧の足らぬ人

てゐるぢや無いか、實に人間と云ふものは間抜けなものす。

イツかの新聞に、人間が輕氣球の上から、下界を見おろして寫した寫眞を載せ、斯うして見ると、地上のものは總べてつまらなく見える、と云つたやうなことを書いてゐたが、たまに二百メートルか三百メートルの空へあがつても、地上のものがつまらなく見えるのでは無いか、憚りながら鴉樣なぞは、毎日〳〵、高いところから、人間の住む地の上を見おろして居るのだもの、人間のつまらなく見えるのは當り前だ、一體人間と云ふ奴、厭やに高慢面で、「人は萬物の靈なり」なぞと、自分免許の勝手な熱を吹くかと思へば、また無暗に卑下して、自身の住んで居るところを下界と云ひ、鴉樣のお住居を上界――とは云はないが、兎に角自分の居る場所を下界と謙遜したところだけが殊勝だよ。人間と云ふ奴は、また同じ種族の人間に對してのみ、見えを飾り、姿を整へることを主としてゐるので、上

實に變テコなものに見えるよ。先日も兩國橋の方から、瓢簞の化け物のやうな奴がころげて來るから、あの妙な形の人間は何んだらうと、仲間に聞くと、あれは梅ケ谷と云ふ相撲取りだ、と云つたが、可笑しな形の奴もあればあるものだ。それからまた近頃は人間の女が、妙な風に髮を束ねることを流行させてゐるから、上から見ると髮の毛が前へ突き出てゐて、鴉樣の眼からは近來頓と人間の女の顏と云ふものが見えなくなつた。人間と云ふ奴、自分の仲間にさへ美しいと見て貰へばよいのだと見えて、鴉樣が上から笑つてゐても、一向氣がつかないのだ。それにまた面白いのは雨の日だよ、大きな、圓い、黑や、白や、茶色やのものが、往來するだけで、人間は少しも見えないが、大分あの圓いものゝ下に、人間が居るのであらうと、想像を逞ふしてゐるのす。

* * * * *

僕はこんなことを考へながら、毎日朝に一回と、夕方

に一回と、鴉の巣をつくつた樫の木の下を通つて、鴉は無事で居るかと、巣のあたりを見あげて行くのを常として居た。時々子供が集つて、石を投げてゐることもあつたが、木が高いので、巣までは兎ても届かない。父母二羽の鴉は、其の愛子に餌を喰べさせつゝ、人の子のする惡戯には一向頓着してゐない樣子であつた。

或る日の夕方、僕がこの樫の木の下を通つた時には、大分大仕掛の鴉征伐が企てられて居た。何時もよく集つてゐる五六人の子供に、稍大きい、十五六の惡太郎を一人加へて、何處から持ち出して來たか、一間ぐらゐの梯子をかけ、惡太郎が今や鴉の巣に向つて進み行くところであつた。木の下に居る五六人の子供は、遠征の將軍を送ると云つたやうな風に、いづれも仰向いて、梯子を上り行く惡太郎の姿を見て居る、中には鼻の下にだらしなく二本棒を垂らしたのもある。僕はスワ事だと、鴉の爲めに覺えず胸を抱いたが、何んたる愉快、惡太郎は梯子から、第一の枝に移らうとする時、過つて足踏み滑べらし、眞逆樣に小笹の茂みの中へ落

ちた、人間ならば國民後援會とでも云ふべき梯子の下の五六人の子供は、呆れて見てゐる。鴉征伐はこれでおヂャン。僕は漸く胸を撫でおろした。

翌日の同時刻に、例の通り樫の木の下を通つて見ると、今度は容易ならぬ大事が起つて居た。鴉征伐は益々大仕掛になつて、印絆纒を着た倔强の男が三人も居て、梯子も三間ほどのが、かけてある。黑木や奥では駄目だから、大山元帥自ら御出馬と云ふところと見える。國民後援會も、今日は五六人で無く、二三十人も居る、中には近所のお妻さんや娘も居る、家にはそれ〴〵用のある時刻だから、こんなものを見て居る中に、晩飯のお菜が焦げつきはすまいか、と餘計なことを考へてやりながら、僕はお妻さんや娘の顏を見て居たが、彼等は平氣なもので、「キイちやん、ミイちやん」なぞと騷いでゐる。

鴉征伐は開始せられた。印絆纒の男の中の一人は、今梯子を上つて行く。また昨日の惡太郎のやうに、あの邊から眞ッ逆樣に落ちればよい、と思つて見てゐたが、

今日はさうは行かぬ。印絆纏は、梯子から、木の股になつてゐるところに乗り移り、枝と枝との間を攀ぢて、猿のやうに、巣のある方へ上つて行く。今日は兎ても助かりさうに無い。父母二羽の鴉も、漸く其の危險を知つたと見えて、カア〱と啼きながら、印絆纏の頭近く飛び舞ふて、動もすると、其の嘴の一撃を印絆纏の頭上に加へやうとする、印絆纏はそれを片手に拂ひつゝ、『畜生ッ、ヒドイ奴だ』と云つてゐる。ドッチがヒドイ奴だか分らぬ。僕は覺えず、鴉の爲めに神の祝福を祈つた。しかし神樣と云ふものは、こんな急場の間に合ふもので無い。

印絆纏は到頭巣の傍まで行つた。二羽の鴉が狂氣のやうになつて、啼き立てる中に、時々『カアー、カアー』と發音の幼稚な啼聲も混る、それは子鴉の啼聲である。彼れは既に印絆纏の爲めに、むづと其の身體を握り締められて、まだ十分に發育せぬ羽をバタ〱させ、まだ固まらぬ嘴を開いて、印絆纏を嚙まうとして居るのであるが、到底力の及ぶもので無い。印絆纏は凱歌を

あげて、木から下りて來る。父母二羽の鴉は、如何にもして其の子を救はんものと、必死の勇を奮つて、印絆纏に肉薄して來るが、忽ちに追ひ拂はれて、空しく『カア〱』の叫びを立てゝゐる。

印絆纏は梯子を傳ふて、地上に下り立つた。彼れは今まで左の手だけで攫んで居つた鴉の子を、右の手をも加へて、兩手で、ギウッと攫み直した。いくら騒いでもモウ駄目だ、父母二羽の鴉は、まだ狂氣の如くに飛び廻はり、或る時は、印絆纏を中心にした惡人の群近くに舞ひ下り、或る時は、空しき巣のあたりに飛んで行つて、名殘りの温みに、一時間前の親子三人團欒の樂さを偲んで居る。カア〱の啼聲は、斷え間無く悲哀の響を立てゝ、吹く風はドウヤラ雨を催ふして來た。

田園雜咏

赤羽生

△默然と夕暮の野にたゝずみて、雲の徂徠をうち仰ぎ見る。

△なにがし水、くれがし丘や、むかし我が芝刈りし所、魚釣りし所。

二個の犠牲

荒畑寒村

故郷！と聞けば、僕はつねに、山や、森や、牧場や、野原や、小川や、水車や、それからまた草花の咲き亂るゝ古城の廢墟や、そこに座して花の香をかぎながら青春の戀を語る若い男女や、彼所の上を囀り飛ぶ鳥の聲や、それ等のものを空想に描いて、そして僕の生れた古郷も亦そんな樂しい美はしい小村かの如くに想像するのだ。けれ共事實は決してそうではないので、現代の社會制度や親孝行てふ美名の犠牲となつて、僅かの金に購はれた憐れな美くしい姉妹が、悲しい慘ましい世渡りをして居る遊廓、噫それが實に僕の故郷、懷かしい故郷なのである。

南海の天地に放浪して、雄大なる熊野の山水に親しむと半歳あまり、今年四月僕は再び故郷の實家を訪づれた。けれ共見るものも聞くものも僕の心を喜ばしめない耳りか、却つて何一つとして悲しく愁れはしき想ひ

を抱かしめぬもの迚はないのである。聳へ立てる妓樓は僕を嘲けるが如く、湧き起る絃歌の聲は僕を笑ふにも似て居る。僕はまた其處に艶かなる姉妹の慘ましき姿を見、その聲を聞いた。また嘗て僕等とスクールメートであつた此處の青年の多くが、粗野なる僕を冷笑して過ぐるのも見た。さては見知つて居る幼なかつた唄ひ女の、見違へる許り大きくなつたのも見た。アヽ僅かの間にいろ／＼變つたと僕はつく／＼想つた。併し變つたのは只だそれ丈ではなかつたのである。

變つたのは只だそれ丈ではなかつた。これも矢張り僕のスクールメートであつて、そして僕と同年の一青年が既に結婚して居たのである。僕は始め之れを他の人から聞き、更に後に親しく彼れ自身に接して其の事情を聞いた時、實に憐れむべき友の爲めに泣き、そして現代の家族制度の殘酷を憤ほらざるを得なかつた。噫されど斯くの如き殘酷なる制度の犠牲となつて、空しく煩悶悲哀のうちに日を送るもの、豈に啻に吾が友一人耳ならむや。僕は世には多くの友と同じ境遇に在る

者の多きを想ふて、眞に同情の念を禁じ得ないのである。乞ふ僕をして友が結婚するに至りし間の事情を語らしめよ、之れを語るのは友一個の爲め耳ではあるまいと信ずる。

友の家は廓内で菓子商を營むで居るので、父は數年前に沒し兄は去る卅七年砲兵として出征し、旅順背面に於て戰死して了ふたのである。其友の兄に妻と一人の子とがあつた。然るに彼の母は家族扶助料の一部を割いて嫁に與へ、そして其の實家に皈らしめ樣とした。けれ共嫁は『爰を死處として來たものゆゑ下婢代りにても可ければ是非此家に置いて與れよ』と懇願したので、遂に其儘止まることにはなつたが、其の代り今まで弟と呼んで居た友と結婚せよと強ひられ、友もまた家の後繼たるの故を以て無理に承諾せしめられ、玆に遂に彼等の不幸にして悲しむべき結婚は成立したのであつた。噫今まで弟と親しむで居た彼女と、今まで姉とかしづいて居た友とは、只だ親の命の爲めに一點相思相愛の情なくして遂に結婚したのである。想ふに彼

等が含むだ祝ひの酒は苦がい苦がい味であつたらう。自分は冷酷僞善なる道學者の口吻を學ぶ者ではない、故に彼女の再婚を罪惡なりと叫びなどはせぬ、また嫂と結婚した友を責めもせぬ。只だ兩者間の夫婦關係にして眞に愛情に基くものであつたならば、他は敢て問ふの要は無いのである。併し乍ら不幸にして彼等の結婚は、決して相互の愛情に基けるものではなかつた。只だ此れ親の命、噫只だ此れ眞に親の命のみ。僕は自由なる人情の美花を蹂躙する親權の橫暴と、現代の家族制度の殘虐とを深く憤ほり、曾つ彈劾せざるを得ない。見よ此の小なる一事實のうちに、現代の凡ての家庭を一貫して流るゝ、親權の橫暴と、男子の無上權とを認め得るではないか。その夫に死別したるとき世間多數の婦人は『最早要らざるもの』として、容易に離緣せらるゝのである。此れ豈に婦人の人格を無視し、婦人を以て單に男子の附隨者、奴隷として見つゝあるが故ではない乎。而してまた多數の婦人は、下婢となるも、尙ほ且つ其家に止まらむことを欲するのである。

之れ蓋し、凡ての婦人は其の他に嫁せんとするに當つて、常に必ず「嫁ぐ先を死處と定めて決して再び歸り來る勿れ」と、其の親より命せらるゝが故ではあるまいか。更にまた男子と雖ども、そが親の命とし言へば些の愛情無きにも拘はらず、否な自己の愛情を棄つるも尙ほ命せられたる婦人と結婚せねばならぬのである。若し然らずして、彼等が當然に自己の良心の指定に從ふて父母の命を却けんか、不孝の兒てふ惡名は、忽ちにして頭上に冠せらるゝに至るであらう。

嗚呼斯くの如くにして心にも無き結婚をなし、悲しき涙のうちに日を送る者は抑も幾何ぞや。斯る壓制なる結婚を强ひられたる男女は、果してよく幸福なる家庭を造り得るであらふか、よく永久に相別れざるを得るであらふか。僕は友の前途の奈何に悲しむべきものなる乎を想ふて、轉た悚然として怖れざるを得なかつた。

嗚二十歲の夫と六七歲も年長の妻、然もそれは決して相互の情愛に依て成立したるに非ざる夫婦、それが如何にしてよく平和幸福なる家庭を造り能ふべきぞ、世

の男子の放蕩や婦人の姦通や蓋し皆な其の源を玆に發するのではあるまい乎。嗚社會の革命は先づ之れを家庭より始めざるべからず、斯くの如き人の子の自由を壓制する橫暴なる親權に反抗の聲を揚げ、人情の美花を蹂躙する殘酷なる家族制度を破壞するは、之れ豈に吾人靑年の責務ではあるまい乎。

數日の後此のいまはしき故鄕を辭せんとして、僕は哀れなる舊友を見返つた時、年若うして既に生活の爲めに心を碎き、不愉快なる家庭の虜はれとなつて悶へつゝある友が、いたましくも衰ろへはてし面影を見て、友に對する憐れみの情と、世に對する憤ほろしき想ひとに、小さき胸は怒濤の寄するが如く轟ろいたのであつた。

いざさらば、うからやからよ、
はらからよ、わがふるさとよ、
さきくしてあれ。

（古鄕を出づる時。　赤羽生）

製造元

花島煉乳場

伊豆國三島町

○各位の家庭の花の一層美はしからんが爲に



○遠來の輸入品よりも新鮮なる内地製煉乳を薦む

發賣元

逸見山陽堂

東京日本橋區大傳馬町一丁目

(電話浪花二一五番)

中附一

瓦斯引用の大御便利

燈火用
煮燒用
煖爐用
機關用

の瓦斯管取附費用（材料共）は本月より總て申受けざることに改め「ランプ」代は御自辨とし一燈に付金九拾錢以上御好の品を取附け可申又瓦斯竈、七輪、西洋料理器、湯沸器等は御望に依り月賦にて最も割安に販賣可仕瓦斯煖爐は別に損料貸の便法を設け低廉の料金にて御貸渡し可申上候

は「メートル」の位置迄の取附費用を受けず又機關は御便利の爲め英國製最優等品を三ヶ年の月賦にて最も割安に販賣可仕候

●御申込は電話、はがき、口頭にて御通知次第係員出張可仕候

明治三十九年五月

神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社



携帯電燈 SK

（定價金六圓） 學生及び旅行家に適す

衛生　家は必ず備へ置かれよ、睡眠中枕頭に燈火を點じ置くは非常なる大害あり

火災　を恐れ玉ふ方は必ず備へ置かれよ、失火は多く睡眠中の燈火より起る

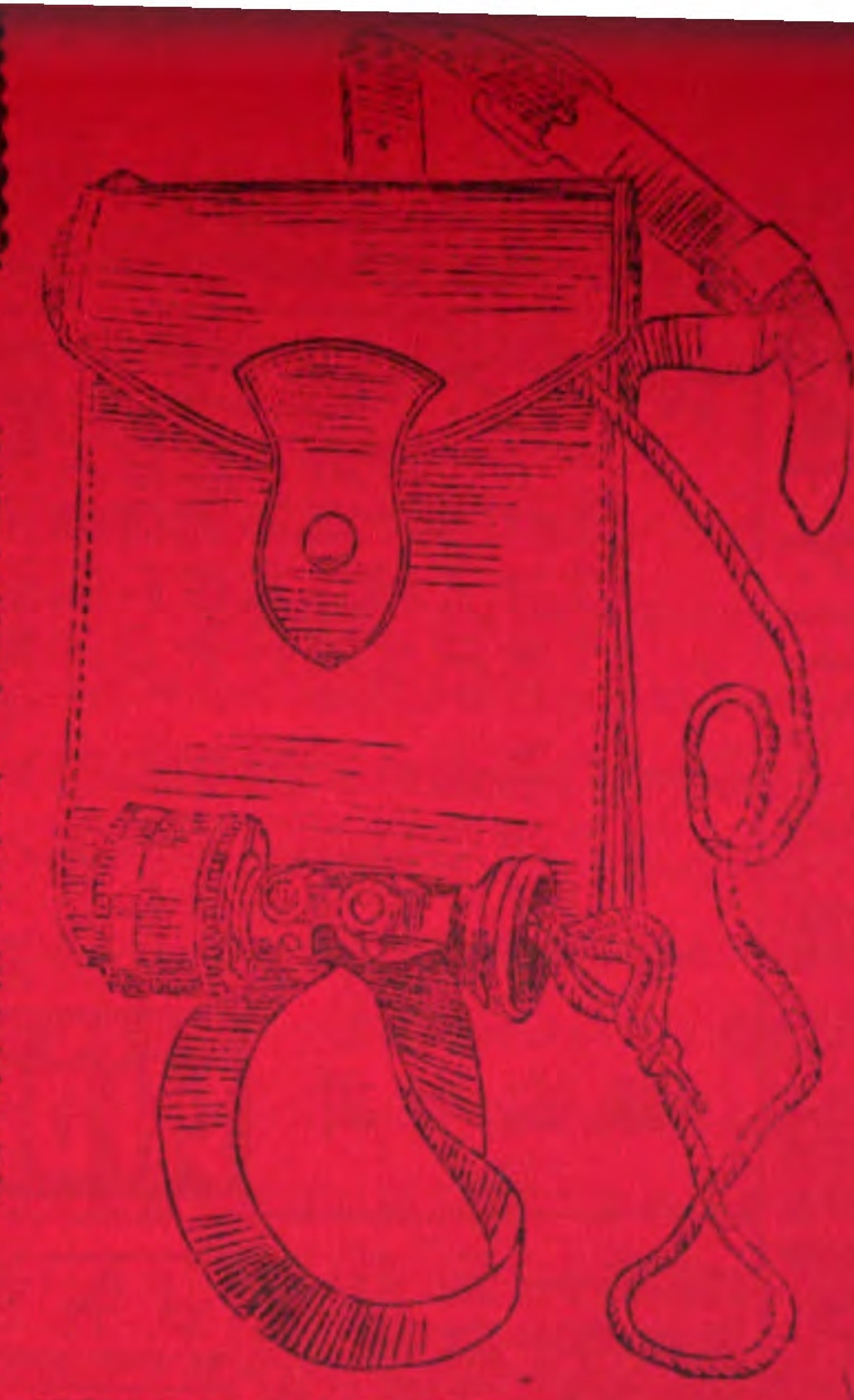
地震　盗難等を憂へ玉ふ方は必ず備へ置かれよ不慮の危險に際しては燈火は直に間に合はぬもの也

旅行　航海家は必ず備へ置かれよ、提燈、ガス燈の如く風雨に消燈する氣遣ひ無し

其他　軍人、警察、醫師、會社銀行學校等の宿直室、倉庫、油業、坑業家とは欠くべからざる文明的常備品也

本品　は斯業の老舗にして最信用ある東京新橋田中商會の製造にして堅牢優美なる逸品たる事は既に定評あり

定價金四圓五十錢、送料十五錢、引換小包にも應ず說明書は御申越次第、無料にて送呈す



特約販賣店　東京市青山南町五丁目七十八番地　有隣商店

村井弦齋氏夫婦大に助力せらる

大好評

婦人世界

實用專一

七月三日發行 每月一回 第七號 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九拾錢 一年分一圓七拾五錢

口繪

◎英國皇后幷に皇太子妃殿下◎名家の新婚撮影（頗る珍品）◎東宮殿下御前席書の少女◎獨逸婦人の描きたる日本畫◎印度の美人と印度婦人風俗◎

彩色石版

夏の富士……中澤弘光

礒の戯れ……西洋名畫

繪本手

金蓮花……跡見花蹊

夏の雨……中澤弘光

婦人の日常生活法

村井弦齋

▲心の食物は何が宜きか

▲讀書は何を擇ぶべきか

▲裁縫は如何にすべきか

▲家庭では何を縫ふべきか

▲股引は如何に用ふべきか

▲洗濯は如何にすべきか

▲買物は如何にすべきか

▲貨幣は如何に取扱ふべきか

▲晝飯は如何に用意すべきか

▲辨當は如何に拵ふべきか

▲入浴は何時が宜きか

▲入浴は何の効能があるか

▲入浴は如何なる順序にすべきか

▲風呂の水は何が宜きか

▲浴後は如何にすべきか

▲爪は如何に剪るべきか

▲爪は如何に檢査すべきか

右は村井弦齋氏が貳拾年間の研究實驗に成る實用的大文字

◎弦齋夫人の料理談

△玉子は如何に料理すべきか

△胡瓜は如何に料理すべきか

△茄子は如何に料理すべきか

△豆腐と魚は如何に煮るべきか

△牛[illegible]

◎學生時代の追懷（鳩山春子）◎外國婦人と日本畫（跡見玉枝）◎暑中休暇は如何に利用すべきか◎買物案內◎武田錦子の面影◎重寶なるミシン器◎小兒夏期の衛生（加藤ドクトル）◎婦人の衛生（伊庭學士）◎夏の流行◎

發兌元 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（電話新橋八七四番） 貸捌 全國各地[illegible]

同病相憐の記（上）

有隣生

人は何時病氣に罹るかも知れぬ、病氣に罹れば治癒るのもあれば、死ぬのもある、どんな健康な人でもおれは一生病氣に罹らぬといふ保證は出來ぬ、然らば健康者に向つて、病氣の事を話すのは、必しも下戸に酒を進め、老人に戀愛を說くやうな無用な事では有るまい

僕の肺に故障があるといふ診斷を受けたのは今から六年前の夏で三十歲の元氣盛りの年だ、肺病といへば先づ難病中の第一位に置くべき難病である、殆んど全快の見込は無い、たゞ養生に注意をすれば何年かは生き延び得らるゝ丈のことだ、之が他の急性的病氣で苦痛短くして治癒るとか死ぬとかの病氣なれば、自分で運命を自覺する暇が無いから却て悲痛は少ないが、一見した處で、何等平生と變らぬ容態で氣も心も確かであるのに突然として肺病といふ宣告を受けたときの心持ちは如何なであろうか、失敗ッた、失敗ッた、之れが一事一物に就ての失敗なれば直に回復の手段方法を考へ出す事も出來やうが、肺病である、不治の病である、死ぬのである、其死ぬまでの間にも最早活動といふ事は許さぬのである、となると人生を滅茶々々にした最後の最大失敗と言はねばならぬ

希望、計畫、活動を許されぬ運命に突然と遭遇した時の人間は果して、どんな心持ちとなるであらうか、絕望の極自殺するのもある、前途に希望をもぎ取られて、到底恢復の見込の無い病境に自暴自棄しては放縱な生活に一變して短き生命を更に縮めるのもある、アレも駄目、コレも駄目、迷信もする、祈禱もする、奇藥妙法、凡そ此病に効能ありと稱えらるゝすべての事を遣り盡して、迚も常識を以て見るべからざる愚を演ずるのもある、併し何れも無理は無い、憐むべき事である、同情すべき事である、健康者に在つては左程にも感じまいが、同病者から見ると此狂態が中々憫然に堪えられ無いのである、僕も當時を回想して見ると實にお話にならぬ事が多い

凡そ生とし生けるもので生命を愛せぬものは無い、併し肺病に罹かつた時の悲痛は單に生命が惜いといふだけでは無い無論生命の惜い事は含まれて居るが實は前途に光明が無くなつて、前に言つた希望、計畫、活動の力を根底から打破されたからである、故に其人の境遇によつて失望落膽の程度が違ふ、要するに名成り功遂げた人と金持ちの人と貧乏人と書生と男子と婦人とを問はず悲痛といふ事は一貫して居つても各々深淺厚薄があるのである

病氣と云へば何病を問はず活動力を殺ぎ生産力を減じ或は全く無くするのだから特に肺病などゝなると最適切に財産と關係するのだ、現時の社會制度では資本家側に屬せぬ多數の人等は此點に於て先づ第一に當惑するのである、轉地療養が善い、營養療法が善い、併しこれは少數の富者の間にのみ行はれる事で、働かねば自宅に居つてさへ困る程のものに何んで轉地療養が出來やう、普通の食事さへも遊んで居つては得兼ねる境涯のものに何んで營養療法が出來やう玆で僕が當時の境

遇を述べねばならぬソレまでは月給取りにもなり、商賣もなして大なる失意にも在り小なる得意にも居り年齢の割合には小さいながらも波瀾の多い前半生であつた、處が其頃は或る會社が雇はれて俸給を以て生活をして居つた、愈々働けぬとなれば第一生活に困るので有つたが實際に於ては僕は意氣頗る旺盛の時代でソンナ事に就てよりもズツト以上の事で悶えた、理想？抱負？覇氣？野心？の實行する事が出來無い、よしや死ぬまでに三年か五年か七年かの期間はあつても、最早何事も出來無いと決れば今死んだのも同じだ、否死んだ方がマシかも知れぬ、前途に何の樂みも無いのだから噫何といふ哀れな運命であらうか如何しても治癒らぬのか知ら、如何しても駄目か知ら、いよ〳〵治癒らぬとすれば扨も心細き情無き事になりしものかな、晝間は家族親戚に慰められ、友人に勵まされなどすると中々元氣な事を言つて居るが深夜人靜まつて孤影寂然たるの時には窃に自己の悲むべき運命に泣いたのも一度や二度では無かつた

斯うなると健康な人が無暗に羨ましい、同時に病人が氣の毒でならぬ、噫世の中に僕と運命を同くして居る人も多かろう學窓の俊才が將に業を終へんとして一朝病の爲めに學を廢さねばならぬのもあろう漸く社會に立つて間も無く倒れたのもあろう一家數口が柱石と賴む働き盛りの人で此病に犯されて薄命を嘆いて居るのもあろう、新聞の雜報を見ても病氣の爲に困るとか、哀れな最後を遂げたとかの記事にはモー堪ら無くなつて涙がこぼれる他人の話にも永らくの病氣でなど〻聞くと何日頃から發病して現狀はどうで而して年齡は暮し向きはと根問ひ葉問ひしたくなる友達の手紙の端に此頃は感冒でとか、少々不快でなど〻あると平生なれば何心無く見遁がしにする處を直に返書を認めて容態を聽き直さねば止まぬのである、可笑な事だが途上で血色の惡るい、瘦せた苦しげな人にでも逢ふと、君は病氣ですか嘸困るであろうと突然聞いて見たくもなつた、兎に角病人に對する同情が高潮に達して、人を慰諭し自らも慰めて居つた

幾度も煩悶し幾度も絕望して居る中に經過も惡く無し特に極めて初期であるといふのに力を得て茲に一大決心をしたソレが先づ通俗な考へから所謂命有つての物種だ兎に角萬事を抛擲して治療に全力を盡さねばならぬ、煩悶しても絕望しても今更詮無き事である、一番此病氣に打ち勝つて恢復を期せねばならぬ、斯うなれば家に餘財の無い身分などは顧るにたらぬすべての雜問題を即時に解決して一切の俗緣を離れて某寺院の空氣のよい、閑靜なる一室を借りて起臥する事にした、而して第一に病氣を忘れる事にした、身の病境に在るのを忘れさえすれば何も病氣に打ち勝つなど〻力みかえるに及ばぬ、但し病氣を忘れるとは養生を顧みぬと言ふ意味では無い、藥も服めば養生もする、たゞ病氣だから職を棄て〻靜養して居るだの、早晚此病の爲に死ぬだのと言ふやうな念を去つて、自分はたゞ何と無く當分人世の活動を休んで居るのだと思ふ事にした、强いて斯うしたのだ、既に自分の病氣を忘れるのだから、今迄のやうに他人の病氣に同情を寄する事も出來

ぬ、否、成るべくしないやうにする、ツマリ病氣といふものはソンナに心配する程のもので無いとしてあるのだ、處が之れが頗る不自然な考え方で遂に無効である事が後日に分つた

當時友人から聽いた故原坦山師の惑病同根論といふ、病氣と惑ひとは同根だ、惑の無いものは、病氣は無いとの説を喜んで、ナニ病氣はソンナに憂ふるに足らぬ、病氣で倒れるのは惑ひで倒れるのだ、まして、悲慘な運命など、自分で極めるのは愚な話だとして、成るべく病的方面に鋭敏なりし神經を鈍くするやうに努めた、其頃丁度故中江篤介の一年有半の出た時で僕の日記に斯う書いてある「おのが生命の將に一年半なるべきを自覺して生前に遺著を思ひ立ち病苦を忍んで成りたるは此書なり、何ぞ其境遇の悲くして其心事の壯なるや頃日此著の世に出でんと傳へられし時我は一日も早く讀んことを望みたりき然るに今友人より寄贈の此書に對して頗る躊躇せり、讀まんか、否我一たび繙かば此著に對する同情の極めて深く厚かるべし恐らくは滿腔

の同情を傾注して止まざるべしこれ冷靜を要する目下の境遇に於て嚴禁すべき事なり」と、實に矛盾した話で強いて病氣を忘れやうとする一面には、却つて病氣が苦になつて居る事を自白したやうなものだ、後日此書を愛讀した時に、我ながら苦笑を禁じ得無かつた事もある

半歳許りは此方針で遣つて居つたが、何分病氣が初期であつた爲に殆ど元の健康體に復した、無論全治した譯では無かつたろうが兎も角も醫師が打診の上に於て僕が自覺の上に於て肺部に異狀が無いものと認められた、故に不治の肺病であるといふ觀念は無くなつて、元通り業務に從事する事になつたが此時分から僕は決して健康なる體質で無いといふ感じが起つて、専ら養生に注意する事になつた、病人に對する同情も更に深く厚くなつた、僕は幸に全治したが世の中に何が一番氣の毒だつて慢性不治の疾患に罹つて居る人ほど氣の毒なはあるまい、彼等は何を思ふても、ソレを行ふ力が無いのである、人間とは何か遣つて見たくて又何か

遣らねば満足の出來ぬ通有性があるのに、ソレを遣らせ無いのは病氣といふ障害である、一朝不治の病に罹ると大なる絶望落膽するのは決して無理では無い。其頃正岡子規氏が肺病に加へて全身不隨症で病床に呻吟しつゝ日本新聞紙上に俳論歌論其他百般の論評を試み其非凡なる精力を發揮して世の病人に尠からぬ感化を與へ併せて健康者にも舌を捲かせた、而して死んだ。ソレから醫學士の近藤常次郎氏は之も全身不隨症で京都の醫科大學の病室の一隅に在つて「仰臥三年」を著し正岡氏にも讓らぬ穏健なる思想を表白した、而して死んだ。ソレから紅葉山人も胃癌で平尾不孤氏も肺病で近くは谷活東だの大澤天仙だの富岡永洗だのといふ文士や畫家も肺病で倒れ、大鳥次郎氏が胃癌で逝きしなど少壯なる人等が續々死んでゆく、之れ等は多く文學や藝術に從事した人で多少名前の知た人であるが、其他類似の薄命を數え立てたら恐らくは數限りの無い事だらうが兎も角も僕は「一年有半」の中江氏「子規隨筆」の正岡氏「仰臥三年」の近藤氏等に對して如何なる同情を寄せ、および、是等三氏の外の多數の同一運命者に向つて如何なる感想を抱き居るかを語つて見たいのである、一寸斷つて置くが、僕は固より實業界の片隅の方で少さな事を爲て居るもので別段平素文學に親む職に在るのでは無い、ソレが衛生に關する書籍、特殊の病氣治療法、或は病人の著述などに注意するやうになつて、又コンナ事を同病者に語らうとするのは全く發病以來に生じた傾向である。

GYŪNIKU.

A: "Gyūniku wa doko ga umakarō?"
B: "Yahari kurashita ka nē."
C: "Kanda no Nakagawa ja."

YAKIBA.

A: "Orā shindara doko e iku darō?"
B: "Muron jigoku da nē."
C: "Mazu yakiba sa!"

屠牛を見る

トルストイ
堺利彦譯

數日前、予はツラの町の屠牛塲を見に行つた。此の屠牛塲は成るべく動物の苦痛を少くせんが爲に、最も進步したる方法を取ると云ふ事であつた。

是より先き、予は彼の菜食主義の有名の著述『食膳の倫理』を讀んで、一たび自ら我が眼を以て屠牛塲を見たいと思ひ立つた。然るに、最初の間は何となく、此の知りつゝも避くる事の出來ぬ苦艱に對し、之を見るのが恥かしい樣な心地がして、延ばし延ばし仕て居たのである。

然るに、其後或日、予は途中にてツラの町に歸る一人の屠者に會つた。彼はまだ熟練した屠者ではなかつた。そして彼れの職務はナイフを以て動物を刺す事であつた。予は彼に、動物を殺して可愛そうとは思はぬかと聞いた。『可愛そうだつて仕方がありませんや』と

彼は普通の答をした。けれども予が、仕方の無い事はない、肉を食ふのは必要では無くて贅澤であると話したらば、彼はそれに贊成して、如何にも動物に對して濟まぬと云つた。『けれど矢張り仕方がありませんや。是を仕なけりや私が食へねいのだから。私も初の中は殺す事が怖くてならなかつたんでさア、私の親爺なんぞア、一生涯に雛子一疋殺した事のねい男でさア。』露西亞人の多數は實に生物を殺すに忍びぬ者である。彼等は是に哀れを催して、常に『怖い』といふ言葉を以て其の感情を現はして居る。即ち此男も亦た最初は怖いと思つて居たが、今ではモウ何ともなくなつたのである。彼れの話に依れば、屠牛は大がい金曜日に行はれて、其日は夕方まで續けてヤルといふ事であつた。

其後又或日、予は豫備の軍人なる一人の屠者と語つた事がある。彼も初は一通りの平氣な返事をして居たが、後には遂に予の言葉に同意して、『殊に善く馴れた奴なんぞア、ホントに厭な氣がしますア。人を信用して、安心して來るんですものねえ。可愛そうに！罪でさ

ア。』

嗚呼是れ實に恐るべき事である。敢て動物の苦痛とか死とかを云ふのぢやない。人間が其の自然に動き來る、高尙なる同情の念を押し殺して、强いて自ら殘忍の行ひを爲すとは、實に恐るべき事ではないか。そして生物を殺してはならぬといふ念が、如何に深く人心の中に植ゑられてあるかゞ分るではないか。

又或日、予はモスコウからの歸り途に、セルポホフから近處の山に木を伐りに行く荷車に乘せられた事があつた。予の傍には倔强な、赤銅色の、一杯ひつかけて居るらしい、荒男が坐つて居た。或村に入ると、善く太つた、丸々とした、大きな豚が、今小屋の中から引ずり出されて殺される所に行きあはせた。豚は人間の叫ぶ樣な、恐ろしい聲を出して叫んで居る。我々の車が丁度その側を通る時、彼等は其豚を殺しはじめた。一人の男がナイフを以て其喉を突いた。豚は非鳴を擧げて人々の手から其身を振りはなし、血みどろになつて逃げだした。予は近眼であるので何もハッキリとは

見えず、只だ人間の樣な肌色をした豚が、鳴き叫んで狂ひまはるのだけが見えて居たが、予の傍なる車屋は、ジッと具さに其の始終を見て居た。彼等は又豚を捕へて引ずり仆し、遂に其喉を切り通した。豚の叫びが止んだ時、車屋は溜息を吐いて云つた。『人間はこんな事をして報が來ねいものかなア』。

人が殺す事を憎むの念は實に斯くの如く强きものである。然るに、前例に依り、貪欲に依り、神が之を許すと云ふ說に依り、殊に何よりも習慣に依つて、人は全く此の自然の情を失つてしまふのである。

或金曜日、予は遂にツラに行く事に決した。途中で、柔和な、親切な、一人の知りあひの男に會つて、それに同行を勸めた。

『私も聞いて居りますよ、彼處の善く出來て居ると云ふ事は。それで一度は行つて見たいと思うて居るのがすが、殺して居る處にやア入れませんや』。

『何故さ。私は又その殺す所を見たいと思ふのだ。我我が肉を食ふ以上、殺す事は當り前ぢやないか』。

「否、私にやア迚も見られませんや」。此男は獵師で、平生、鳥や獸を殺して居るのに、猶ほこんな事を云ふのである。

それからトウ〳〵二人連れ立つて屠牛場に行つた。門の入口からしてモウ何だか妙な厭らしい臭氣がする。段々奥に入ると其臭氣が一層はげしくなる。建物は赤い煉瓦の大きな家で、高い煙突などが立つて居る。戸を開けて内に入ると、右側には牛を放して置く廣場がある。そして其傍に屠者の休憩所が設けてある。左側には屠牛室が幾つも並んで居る。屠牛室は床を少し斜面の漆喰にして、死骸を動かしたり、釣したりする爲め、器械が色々備へてある。屠者休憩所のベンチには、五六人の屠者が血の附いた着物を着て腰かけて居る。其の袖をまくりあげた腕にも、あちらこちら血が附いて居る。彼等は今正に今日の屠牛を終つた處であつた。それで此日我々は只だ屠牛室だけを見せられたが、室内には腥さい臭氣が充ち滿ちて、漆喰の床は血に染んでキラ〳〵と光り、片隅の穴には眞黒い堅まつ

た血が溜つて居た。

屠者の一人は予に屠牛の法を説明した。其説明は予に十分の理解を與へなかつたけれども、予は兎にかく極めて恐ろしい屠牛の光景を想像した。然し予は跡で考へた。斯くは恐ろしく想像するもの丶、善く何事にもある如く、若し實際を見たならば、思つた程の事もないと、却つて其感を薄くするかも知れぬ。と考へた。所が、それは違つて居た。

次に予が此の屠牛場に行つた時には、丁度善い時刻であつた。それは六月の末の暖い金曜日であつた。構内の惡臭は此前の時よりも更に甚だしい。屠牛は今正に盛んに行はれて居るのである。廣場には家畜が一ぱい入れられてある。そして順々に屠牛室の隣の構ひの中に入れられて居る。今丁度小牛を積んだ馬車が來て、解きおろされて居るのもある。それと擦れ違いに、赤い臓腑だの、黄色い皮だの、ピリ〳〵震へる肺だの丶見えて居る、牛の死骸を積んだ馬車が、勢ひよく歸つて行くのもある。此の家畜を殺して貰ひに來た商人共

は、長い上衣を着て、手に鞭を持つて、廣場の中をブラ〳〵しながら、自分の牛に目標を附けたり、屠牛室に追ひこむ手傳ひをしたり仕て居るが、彼等の腦中には錢勘定の考へが一パイになつて居て、是等の動物を殺すことの是非善惡などは、屠牛室より流るゝ血液の科學的成分の如何などゝ同じく、全く問題以外になつて居る。

廣場には屠者は一人も見えぬ。彼等は皆室内に入つて屠牛に從事して居る。今日は百疋の牛を殺すと云ふのである。予は一つの屠牛室に入りかけたが、忽ち其の戸口の處で立留まつた。室内には死骸が一パイになつて、今それを取かたづけて居る。そしてそこら一面に血が流れて、上の方からもポツ〳〵と落ちて居る。若し予が室内に踏み入らうものならば、予は血だらけにならねばならぬ。高く釣りあげられた一つの死骸は今取おろされかけて居る。一つは今戸口の方に押しやられて居る。今一つは四足を逆様に立てゝ轉がつて居る。そして一人の屠者が其皮を剝いで居る。

予は戸口に立つて見て居ると、其の反對の側の戸口から、大きな、赤い、善く太つた牡牛が一疋引きこまれて來た。二人の男がそれを引張つて居る。漸く室内に入つたかと思ふと一人の屠者はナイフを高く振りかざしてそれを突き刺した。牛は四足を一時に踏みはづした如くにバツタリと横に仆れたが、急に又跳ね返つて一方に仆れ、四足と尻の方とをバタ〳〵させてモガキはじめた。すると一人の屠者は後の方から飛びついて、兩手に角を持つて牛の頭を地に擦りつけた。すると又一人の屠者はナイフを以て其喉を掻き切つた。頭の下から黑赤い血がダク〳〵と流れ出る。血まぶれになつた小僧が錫の鉢にそれを受ける。牛は猶ほ逃れんとするものゝ如く、少しづゝ其頭を震はせ、四足を空中に動かせて居る。錫の鉢は一パイになつたが牛はまだ死なぬ。小僧は其の血の鉢を頭の上に載せて製藥室に持ち去つた。他の小僧は更に他の鉢を以つて之に代つた。牛は猶ほ其の體を震はせ、其の後足を動かして居る。

血が出てしまふと、屠者は牛の頭を引起して皮を剝ぎに掛かる。牛は矢張りピク〱ピク〱と震へて居る。皮を剝がれた頭は、真赤な中に白い血管を現はして、屠者の据ゑた儘になつて居る。それでも猶ほピク〱と動いて居る。次に一人の屠者は一本の脚を取つて、無雑作にそれを切り離した。殘つた脚や腹の邊には猶ほ痙攣が續いて居る。それから順々に殘つた脚も切り離されて、今度は死骸が上の方に高く釣りあげられる。そして痙攣が漸く終る。

予は斯くて第二、第三、第四の牛の殺されるを見た。其の順序は皆な右の通りである。只だ少し違ふ事のあるのは、屠者が必ず見事に一打で牛を仆すと極つて居らぬのである。時としては狙の外れる事がある。其時には牛が跳ねあがつて、鳴き叫んで、血まびれになつて逃げ出さうとする。けれども其時には、直ぐに牛の頭を横木に引き据ゑて、第二撃を加へて殺してしまふ。

予は後に牛の入る戸口の方に行つて見た。予は此處で以前と同じ事を、更に近く、更に明かに見た。然し

予は此處で以前に見なかつた一事をも見た。それは牛の厭がるのを強いて無理やりに此處に押しこむ事である。牛は屠牛室の隣の構から、綱で以て引張られて來る時、血の臭を嗅いで立止まつてしまふ。時としては悲しげに鳴いて跡しざりをする。二人の男の力で之を引張りこむ事は迚も出來ぬ。そこで一人の男は後に廻つて、牛の尻毛を攫んで其骨のピチ〱と云ふほど捩ぢりあげる。すると牛は據んどころなく前に進むのである。

一人分の牛が皆な殺された後、更に次の人の分が送りこまれた。此組の中の最初のは、大きな強さうな斑牛であつたが、是は引張られて來た時、頭を低く下げて角を前に突出して、ドウしても前に進まぬ。後に居た屠者は即ち、恰かも汽鑵方が汽笛の持手を持つが如くに、片手に其尻尾を攫んで、そしてそれを捩りあげた。尻尾の骨がピチ〱と鳴つた。牛は綱を持つて居た前の男を突倒す様にして突進した。すると又忽ち踏み止まつてジツト兩脇を見やつて居る。其の黒い大き

な目の、白い處は血走つて居る。尻尾が又ピチ〳〵と鳴つた。牛は又突進して丁度好い加減な處に達した。屠者は狙を定めて打ちおろした。誤つて狙が少し外れた。牛は飛び上つて、頭を振つて、悲鳴を擧げて、血まびれになつて、ドタ〳〵と跡の方に跳ね戻つた。戸口に居た人々は皆なバラ〳〵と逃げ散つた。けれども熟練の屠者は少しも騒がず、直ぐに再び綱を引張り、續けさまに尻尾を捩ぢりあげた。牛は又元の室に進んで、横木の下に其首を縛りつけられてしまつた。屠者は再び牛の眉間の毛の兩方に分れた處に狙を定めて、今度は正しく急所を刺しぬいた。

　五分間の後、黒い頭は皮を剝がれて赤い頭となり、只つた今まで光つて居た其眼は、見詰めたまゝでドンヨリとなつて居る。

　それから予は小動物の屠殺所に行つて見た。此處も漆喰の床の廣い室で、テーブルが處々に置いてある。羊や小牛が此テーブルの上で殺されるのである。此處はモウ大抵今日の仕事を終つたと見えて、屠者が二人

殘つて居るばかりである。一人は死んだ小羊の膨れた腹を押へて見て居る。一人は血に染んだ着物を着て煙草なんど燻らして居る。そこに又一人の男が四足を把ねた黒い山羊を一疋持つて來た。彼はそれを恰かも寢床の上に置くが如く、彼のテーブルの上に横たへた。其男は屠者等と懇意な間柄と見えて、今度は何時が休み日かなどゝ話しはじめた。煙草を燻らして居た屠者は、ナイフを持つて近づき來り、テーブルの角で其刄を磨きながら、次の日曜には遊びに出られるなどゝ答へて居る。山羊はジッとしてテーブルの上に横たはつて居る。只だ其の短い尻尾をピク〳〵動かせて居るのと、呼吸の爲に脇腹が常よりも早く動いて居るのとが見えるばかり。やがて屠者は猶は何か喋りながら左の手に輕く山羊の頭を押へて、右の手に其喉を切つた。山羊はブル〳〵と震へたばかり、其の小さき尾は直ぐに硬ばつて動かなくなつた。屠者は血の出てしまふのを待つ間に、火の消えた煙草を吸ひつけに行つた。血は流れて山羊は痙攣を始めた。人々はそれを見向きもせずに話して居る。實に恐ろしき光景であつた。

自殺せむとしたる女學生に就きて

中尾傘瀬

これは前號位に記載するつもりで書いたのであつたが、問題があまり新しくもないので控へたのであつたが、世間はまだなかなか之を論じて已まぬので、つひ遲れながら再び掲載する氣になつた。

村上專精博士の許へ、某女學校の一生徒が、突然一封の親展書を寄せて、博士の親切なる解答を求め來た話がある。（事は三月十八日。事の公になつたのは「同朋」四月號。）

其書の大意を掻い摘まんでいへば、——自分は人生の目的と道德の標準とに疑を起し、解決を得むとして得る能はず。今は其苦悶に堪へざれば死せむとおもふ也。別紙は過ぎつる日、病牀で認めた「遺書」であるが、之をも御覽の上、然るべき教訓を下されたいといふにある。

而して其遺書といふは、一寸長い文で、——先づ生存の苦痛にして無意義なることをいひ、其無意義なるは人生の目的不可解なるが故にといひ、死は果して意

義ありや否や、苦痛を取り去り得るや否やを知らずと雖も、今之を實驗して、（恐ろしき實驗である！）若し快樂ならば此處に滿足を得む。若し苦痛なりとするも、生存が苦痛を離れざることは二十年間の生存之を證したれば、悔ゆる所なしといひ、最後に、死は惡にして生は善なりとの眞理何處にありや、また、何を以つて此苦痛に堪へて生存することをなさむや。我は死すべきのみ抔と云つてある。

文辭を解剖すれば、一篇の文字としては、此類の自殺者のそれの中で、可なりの出來であるが、思想の文としては、固より整頓せざるものもあつて、到底深く哲學を考ふるほどの頭腦では無いことが見え透いてゐる。

村上博士の之に對する解答は、諄々として老婆の親切を極めたものであるが、要するに、——人生の目的は生を愛するに在り。即ち天然に從ふに在る也。道德の標準も之に據つて定まるので、生を愛するに就いての行爲は、悉く善。之に反するの行爲は、悉く不善と

なる、但し生を愛するといふは、唯己一人の生を愛するのみでは無い。他人の生をも愛するのである。延いては動物の生をも愛するのである。基督の愛、孔子の仁、釋迦の慈悲、皆此意を道破したものに過ぎぬ、といふに在る。

手紙の主なる一女學生は、之にて滿足したか否か、其後の消息は知らぬ所であるが、余も試みに之が解答を作つてみた。

* * * * *

旣に生あり。何等かの意義が無くてはならぬ。今短刀直入に、吾人の信仰より云へば、必ずしも人生と限らず、宇宙自然、ありとあらゆる物の存在は、すべて至上者の愛の發現である。『二羽の雀は一錢にて售るにあらずや。然るに爾曹の父の許なくば、其一羽も地に隕つることあらじ』人生の意義は實に此處に在る。あゝ至上者の愛！人生を解くものは即ち是れである。現象も實在も、客觀も主觀も、皆から人の子の爲に備へられてあると見る。（安慰は此處より生じて來る。）解決

の順序も此通りで、至上者の認識、之が其本にして、人生諸種の問題は、其末のことに屬する。この順序を誤らば、疑問は忽ち百出して、みづからの存在さへ解からなくなるので、一女學生の如きは其人ではあるまいか。

彼女は、頻りに人生の目的を疑ひ、生存の意義を怪むと雖も、吾人人間の小智を以ッてして、爾く人生宇宙の事が、何から何まで悉く解し得らるべきものでは無い。まして此世の聖人偉人が三十、四十にして、漸く達悟したものを、女史僅かに二十年餘の幼弱を以ッて、爭で此深遠微妙なる諸種の問題を解決し去ることが出來るものぞ。殊に笑止なるは、女史六才の時既に道徳の問題に腐心したりといふが、（博士宛の文中にあり。）これは恐らく文字の誤であらう。山陽の天才にして、一日蒼々たる天を仰いで『彼蒼は如何なるものぞ』と、其母に打問ひたりといふ話が、彼の九才の時であッた。余は女史を以ッて、直ちに山陽に劣れりといふではなけれども、凡そ千年に一度、百年に一度しか世に現はれざ

るほどの、世の聖人偉人が、苦心煩悶して尙解き難ねた宇宙人生の問題を、十九や二十の年頃で、易すくと斷じ去らむとするを大早計といふのである。

女史の如きは、やはり現代思想界の流弊に中てられて、己が淺墓にして限ある智識を以ッて、かの絶大無限の問題を解決せむとしたる爲に、全く力負けしたものである。されば其思想といひ思索の方法といふも、文に據ッて察するところ、滅裂なる雜誌文學の集合に過ぎぬ。之を煩悶といふもおほけない位で、迚もヨブやエレミヤや、オ、ガスチンやスピノサやヴォルテエヤなどには比すべくもあらぬ。尤も是等哲人のなしたる程度の大煩悶は、敢て爲して妨げぬのみならず、却ッて大悟徹底に誘ふ道行であらうが、女史の煩悶の如きは、半文の價も無いと謂はねばならぬ。勿論ゼノオン以來近世ショッペンハウエルに至るまで、隨分自殺哲學を唱へた人もあるが、女史の如き深刻ならぬもので は無いゝあゝ斯く古の聖人偉人を援き來たるのも大人氣ない沙汰である。）畢竟は舊道德が既に權威を失ッて

ゐるのに、新道德が未だ建設せられず、加ふるに西歐思想の輸入があッて、思想界は益々混亂を極めてゐる過渡期に生じた變象に外ならぬ。

然も喜ぶべきは、斯くの如く靑年の士女が舊來の思想の桎梏から脱出して、自由に空想するに至りし點に在る。悲むべきは、彼等が深く瞑想する能はずして、皮相の迷妄にとゞまり、叨りに死せむことを願ふに至りし點に在る。

是等の變象を愛山君は、學生生活の贅澤より來たるといひ、雪嶺博士は冥想多くして活動なきが故に起るといッた。共に急所を射た言と思ふ。但し瞑想の語は中たるまい。迷妄ぐらゐであらう。蓋し靑年學生が眞に冥想に堪へるやうになれば死など冀ふわけは無いのである。所が多くの者は瞑想に堪へずして、徒らに淺近なる煩悶を叫び、世の不完全を訴へ、事の不如意を嘆き、忽ち厭世の念を起して、ともすれば死を懷ふに至るのである。洵に愚なるわざではないか。吾人は却つて人事の意の如くならざる裡に、人間の小智を以つて

測り知るべからざる難問題の裡に、人生の意義もあり、趣味もあり、目的もあり得ると信ずるのである。

人事不如意ならば、精進して改革するがよい。社會不完全ならば、先づ力の限り働くがよい。死ぬるに及ばぬ。死んでは何にもならぬ。死ぬるつもりで働けば、必ず少しづゝなりとも思ふやうになつて來る。どうせ世の中は瑕瑾だらけのものなれば、之を良くして行くが、人類相互の義務ではあるまいか。又人生の目的ではあるまいか。

すべての者は、夫自身の爲に存在すると共に、共同の爲に存在してゐるので。其活動は相待つて自他の向上を資くる爲になる。「すべての事は夫自身に働きて、すべて益をなす」とは、ボオルの言である。學生が眞面目に學問を續けて居れば、續けて居るだけ・それだけ自分の益を爲し、從つて他の益を爲し、又それだけ面白くなつて來るわけである。さうすれば今迄さほどにも感じなかつた平凡の事が、趣味あり、價値あり、意義あるやうになつて來る。ラウレンス上人の說敎を

聽かないか。

O, mickle is the powerful grace that lies
In herbs, plants, stones, and their true qualities,
For nought so vile that on the earth doth live,
But to the earth some special good doth give;………

人生の目的は、Better life に在る。今爲すべき事に努力熱中するに在る。餘り遠方ばかりを望んで、脚元にぬかつてはならぬ。然も多くの者は、此深き意義を悟らず。譬へば探偵小說を讀むが如き心地にて、人生を考へ居るやうである。人物の性格、徑路の描寫の如何は、彼等の問ふ所にあらずして、只管結末を急ぐのである。而して結末の意外につまらなき時には、又茫然自失せむとするのである。然れども人生は斯くの如きものにあらずして、寧ろ反覆に價する高尙なる小說に似てゐる。其結末は何うあらうとも、亦知れて居らうとも、それよりも結末に到る描寫の途中のおもしろさに、幾度も繙きて深く味ふといふところに、人生の意義が含まれてあるので。たゞ探偵小說に對するやうな人生觀を抱く人は、人生の目的を遠き彼方に求む

るのみか、それをあせり求めて、却つて失望するので ある。爾くあせり求めずとも、常に眞面目にさへ働いて居れば、おのづから達し得らるゝのである。聖句の『明日の事を思ひ煩ふ勿れ』で、現實に樂んで働いて居れば、それでよいので。働いて居れば、何でも Better になつて行く。Better になつて行けば、愈々面白いに違ひない。目的は Best よりも、寧ろ Better である。趣味も意義も、此處に在る。

然もかの一女學生が、我は快樂の眼を有たずといふは感謝の眼を有たぬに依るからで、世の中の美を觀る眼を缺いた不幸可憐なものである。彼女は智識や空想だけで人間生活を營まむとしたもので、信仰と意力との必要を知らなくつて、失敗したものである。

終りに、古い俗謠を示して此評論を結ばう。

死ななくも、よかる汨羅に身を投げて、
世に偏屈の名を殘す。あれ見やしやんせ沖の舟。
風がかはれば、帆もかはる。

風がかはれば、帆もかはる。泛々たる男女學生の好箴砭ではあるまいか。

眞坊の御友達

良子

眞坊のお友達に神原の孃ちやんと云ふのがある。夜が明けて孃ちやんが下女に送られて來ない時は眞坊が押し掛けて行く。眞坊を大黑天の似顔と云へば、孃ちやんは惠比壽の似顔である。孃ちやんが寢れば眞坊も寢ると云ひ孃ちやんがお菓子を二つ持てば眞坊も二つ持つと云ふ。孃ちやんが折々むづかつて足をバタつかせるのを見て歸つた眞坊も、足で疊太皷を打て泣く。孃ちやんがお父さんと寢れば、眞坊も一番すきなおかーさんを離れてお父つさんと寢ると云ふ。眞坊が孃ちやんの所に遊びに行つて、お晝に成つても歸つて來ぬ折々は、お晝も孃ちやんと同じ茶碗、同じ箸で御馳走になつて嬉しがつて居る。何をするのも、二人一所でないと足太皷を打つにきまつて居る。

眞坊は絣の衣服を男のべべと云ふて居る。眞坊が男のべべを喜んで衣るのは、神原の孃ちやんが男のべべを

衣て居るからである。神原の孃ちやんがおつかさんの膝に上れば眞坊もおつかさんの膝に上る。孃ちやんが乳を呑めば、眞坊はおつかさんの耳を握る。

眞坊は車町のお湯に行きつけて居るので、そのお湯屋の事を眞坊のお湯と呼んで、決して外の御湯には行かぬ。御近所から折角お湯に呼ばれても、眞坊のお湯に行くんだと云つてだゝをこねるから、いつも眞坊の勝利と成てしまふ。眞坊は漬物が非常に好きである。時々大人の分に切らずに胡瓜を出して置くと自分も其の大きなのを食べねばどーしても承知しない。神原の孃ちやんの所で御馳走に成る時に『大きなコンコンを食べたのよ』等と自負して言ふので、孃ちやんも亦直ぐ大きなコンコンと云て、むづかり始める。惠比壽、大黒の兩少女は、斯して無邪氣に日を送つてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊



眞アちやんは四つになつたのだ。ボクの古郷靜岡の新らしい空氣を吸つて大きくなつた。ボクは未だ一度も其のおコシヤな顏を實際には見ぬが、その代り寫眞には平生よく親しんでゐる。眞アちやんは今オバさんなる篠田貝子さんをばオツカさんと呼んで、オトツさんなる堺兄をば却つてオヂさんと呼んでゐるさうだ。茲に眞アちやんの記事を載せるに就いて、ボクはドウしても其の寫眞が無くては物足らぬ心地がしたので、堺兄に請うて到頭載せる事を許して貰つた。圖は本年五月十四日の撮影で、向つて右が眞アちやん、中央が神原の孃ちやん壽美子(五歳)、左のが矢ツ張り近所の仲よしのお友達で長島多惠ちやん(五歳)といふのだ。かはいいでは無いか。

(深尾生しるす)

米國の農園勞働

在米　延岡常太郎

今度は少し金儲け旁々、カリホルニア州の農園勞働の模様を經驗して見やうと思ひ、五月廿三日バークレーを發してオークランドに行き、そこから電車でヘイワードといふ町に着いた。ヘイワードは一寸した町で、此處に小田原屋といふ日本人の商店が一軒ある。此店は附近のキャンプ（日本人の農園勞働者が起臥する小屋をキャンプといふ）へ食料品や諸雜貨を賣り込むのである。此店で待つこと凡そ四時間、食料品やら衣類やら臥具やらを滿載したる荷馬車に上乘して、自分等の働くべきキャンプに向ふ。

加州の農園！一度アメリカへ來た人は直ぐ想像が出來るだらう。雄大なる農園、しかも話しに聞く中部地方の様な單調な景色ではない。近くに黒い森もあれば遠くに霞む山も見える。のどかに平和な此田舍道を、ゆられながらポカリ／＼煙草をふかしつゝ進んで行く。實に愉快だ。

荷馬車はやがて道を横に曲つて畑の中に這入つた。見れば前に二棟の建物がある。四間に十五間もあらうか、實にお粗末なもの。これが僕等のこれから起臥する家なのだ。建物と建物との中間にテント張りの臺所がある。此處にポンプを仕掛けた井戸もあれば、素人の造らえた竈もある。大きなテーブルがあるのは、僕等が飯を食ふ時の台だ。

僕等が此キャンプに着いたのは午後二時過であつたが、其時は皆な働きに出てゐて、料理番の外は誰も居なかつた。

キャンプへ這入つて見ると、兩側は一間餘りの幅で高さ一尺ほどの板の間になつてゐる。此板の間が僕等の寢臺になるのだ。料理番の先生に敎へられて、ヘイ（枯草）を澤山持つて來て、此の板の間を程よく仕切つた處に敷いて、其上にズックの空袋を敷き、尚ほ其上に毛布と蒲團を敷いてベッドを造つた。枕元の上には細長い棚を吊つて歯磨、石鹸、インキ壺、紙などを程

よく並べた。

さあベッドも出來た。これから晩まで無駄に遊んでもつまらぬからと、試みに働きに出掛けた。三町ばかり歩くと其處が僕等の働く場所だ。大さ七十五エーカー(三十町歩)の豆の畑。日本の兵庫豌豆といふ豆なのです。想像して御覧なさい、三十町歩の畑を!

此豆を摘むのが今度の仕事です。餘り嫩くない、又餘り熟し過ぎて居ない奴を摘むのです。豆は今眞盛で、其の澤山になつてゐる事は、とても日本では見られぬ光景でせう。今五十三人の男女で摘んでゐますが、此豆をザッと一通り摘むのには一ケ月餘り掛かるとの事です。尤もそれも其筈で、一本の畦をザッと摘むに、上手な人で三日、僕等では四日掛りますもの。それとても頃合の奴を悉皆摘むのではなく、只目についたのだけをチョイ〳〵摘んで、ズン〳〵前へ進むのです。皆な摘まうものなら、一畦で一週間も掛かるでせう。全體、此畑には百五十人許りの人が働かねばならぬのを、今其の三分の一より居ないのですから、グズ〳〵して居やうものなら、豆が皆ヒチになつて廢物に歸する虞れがあるのです。此豆はこれから皮をむいて、水煮にして、罐詰にされ、グリーン、ピースと名づけられて市場に現はれるのです。

此の豆を百斤(十二貫目)摘んで六十五仙。賃仕事ですから、働くも怠けるも勝手、これが呑氣な處です。中々面白いので、此日は到着匆々一町ほど試みた。

翌二十四日は朝の七時から摘み始めた。氣候は今寒くなく暑くなく眞に好い時候。廣大な豆畑の中に坐つて、横に籠を置き、端唄、ドヾ一、トッチリトンと昔し覺えただけの遊藝の總浚えをしながら、ピシリピシテと豆を摘んで籠に入れる。入れては進み、進んでは謡ふ中に、段々籠が重たくなる。これをズックの袋に入れる。又籠が重くなる。又袋に入れる。袋は大凡百斤ほど入る。此時實に無念無想だ。善も思はず惡も思はず、只豆を摘むに一生懸命、自然の中で自然を相手の仕事、愉快々々、大に愉快だ。頭は確かに善くなりますよ。

折々休んでポカリ／＼と煙草をふかす。フト前を見ると、目の先に名は知れぬが美しい黄色の草花がある。尚ほよく見ると、花の中に一疋の虻が居た。

此日、朝七時から十一時まで、午後二時から六時まで摘んで、百七十五斤を得た。初日としては非常な好成蹟、追々は二百五十斤ぐらゐ樂になるだらうとの事です。

翌廿五日は朝から雨で仕事は休みだ。此の地方で今頃雨が降るなどゝは實に奇妙な出來事である。僕はウンと寢て八時半頃に起きた。干雜魚に酢醬油をかけた、干大根の味噌汁と、梅干とで、温かい飯を喰つた。惣べて日本製の舶來食品で、實に旨かつた。一体こんなものは日本勞働者の口には中々入り難い上等の品なのだ。

晝には、今日は休みで腹も減るまいからとて、飯を止して、しるこを作えて食つた。晒餡に、うどん粉でこさえた團子を入れた。是亦中々うまい。僕は二杯食つて其後で、出花で茶漬飯を二杯、西京のスグキの樣な旨い漬物で食つた。何としやれたものではないか。

今此キャンプに居る日本人は男女五十三名、純粹の百姓も居れば、スクールボーイ上りの者も居る。種々樣々であるが、其中に五組ばかりの夫婦者がある。中には三才になる女の子を連れて居るのもある。是等の先生は全く無學文盲の百姓で、現在の仕事を天にも、地にも又なき善き職業と心得、滿足して一生懸命に働いて居る。僕等の樣な腰掛的ではなく全く永久的で、チャンとした一と世帶を持つてゐる。そして此の不自由なる異境の生活を自由に便利に平和にやつて行くのは實にえらいものだ。大勢の中には三味線なんぞ持つてる人もあつて、今日は雨ふりの休みとて、娘がピンシャン／＼やると、オヤヂがドラ聲を張り上げて謡ふ。女の子が踊るといふ。實に珍妙極まる光景。呑氣なものではないか。

午後には雨も晴れたので、例の妻君連が働き出した。流石に女だね。今日の休みも無駄にはせじと、洗濯をするもあり、髪を洗ふのもある。湯に入る奴もある。

例の臺所の前の野の中に穴が堀つてあつて、其側に大きなビール樽が一つ置いてある。其前に空箱が一つある。傍に穴が堀つてあつて大きな鍋を掛けて湯を沸しては、此ビール樽に入れる。諸君このビール樽を何と思召す。これこそは僕等の風呂桶なのである。吹き晴らしの見晴らしの、而も男たちが澤山うろついて居る中で、例の媽連中、平氣で裸になつて入浴してゐるのは、少し呆れもする。

序手だから便所の話もしやう。便所といへば甚だ汚い感じがするけれど、こゝのは決してそんな汚いものではない。これも野の眞ん中に四角な大きな穴を堀り、其上に板が四枚載せてあるきり。一度に三四人位ゐはしやがめる。勿論こゝも吹き晴らし見晴らしで、四面に自然の大パノラマを眺め、畫中の鳥がホントに歌ふのを聞きつゝ、野ぐそとは實にしやれたものなり。

此日の晩飯は凍豆腐にポテトー、かぶら、ゑんどう豆等のゴチヤ煮で、何しろ飯は溫かで五十人からのを一度に炊くのだから實にうまかつた。平生は仕事の合

間〳〵に手ん手に食べるので賑かでないが、今日は一緒になつたものだから、それは〳〵混雜を極めて、半分は殆んど立つて食つてゐる。それに其の服裝が千種萬別だ。單物に草履といふ僕等の服裝は上等の部で、多くは寢床から飛び出して來たまゝのシャツにズボン下ばかり、まるで芝居に出る狐のやうだ。それも白狐に赤狐、茶狐、シモフリ狐、斑狐、段々下つて鼠狐などゝ、實に珍で妙で滑稽だ。

食事の費用は、共同の實費で、原料が一日に二十仙ばかり、其に料理番の給金が一人割一日三仙、親方の手數料が收得金一弗に付五仙、兎に角一日で三十仙位ゐは掛かるのである。

* * * * *

米國へ來て田舍を知らぬは、未だ全く米國へ來たと言ふことは出來ない。市內の働きをやつて農園の働きをやらぬは、未だ全く米國で働いたとは言へない。僕今此經驗を得たことを滿足に思ふ。僕今寫眞器械を持つて居る。其内に數枚紀念の撮影をして置きたいと思つて居る（五月二十七日記す）

現實の理想郷

深尾韶

生計の苦みもなく、生存競爭の累ひもなくて、此世を面白く暮らして行きたいとは、私どもの理想、イナ恐らく何人もの希望であらうと思ひます。然し此の理想希望の實際に現せられるのは、まだ〳〵遠き後の世の事と、誰しも思ふのでありますが、實は此理想に叶つた社會が、現に今日に於て實現されてあるのです。此く申せば甚だ不審に思召すでせうが、姑く先づ私の話を聞いて下さい。

* * * *

此の社會の人は大そう早起きです。夜がホノボノと明け渡つて、雀が軒で囀る頃になると、何處とも知れず優しい汽笛の音が鳴り響いて、あちらでも此方でも床を上げる音、ハタキを掛ける音などが聞こえて來ます。間もなく牛乳の配達人や、パン、卵の配達人などが戸毎に配つて廻ると、其の後から車に載せて御飯を配

つて來ます。其後からは同じく車で、色々のお菜や味噌汁や湯までも配つて來るのです。御飯の濟んだ頃になると、直ぐ配つて來た時の容器を取りに來ます。

暫らくすると半鐘が鳴る。これは火事の合圖に打つのでは無くて、人々は此鐘を聞くと皆それ〴〵仕事に取掛るのです。職業を選定するのは此町の長官の權限で、一應は本人の望を聞くけれど、必ず其の希望の職業に就けるといふのでは無い。此くせねば、或る工場にばかり人が集まるといふ樣な事が出來るので、之に就いては長官に全權が任してあるのだ。

工場には各々主任があつて、仕事の捗り方を監査したり、室内の整頓に注意したりして居る。

此町の公民としては、誰でも必ず勞働しなければならぬが、特別の場合は之を免してある。特別の場合とは、病人と老人と幼者と種々の研究者とである。是等の人々は寧ろ殆んど强制的に日々の運動を勸られる。

運動場は一字或は二字毎に共同して作えてある。丁度加藤清正の紋所のやうな圓い庭の中央には、色々の

草花などが植えてあつて、四季折々の眺めは實に美しい。

町の中などに共同の筆記場があり、其處には筆でも墨でも紙でも、必要な品は皆備へ付けてあつて、誰でも自由に之を使ふことが出來る　餘つ程横着な人ででもなければ、大抵は此處へ行つて書き物をする。

此町の人口は千二百ほどであるが、理髪所が一軒、炊事場が一軒、病院が一軒、湯屋が二軒あるきりだ。軒數は少ないが、何れも規模は割合に大きいので、不都合なく用が足りて行くのである。

家は割合に小さい。大きな棟の下を細かく幾つにも仕切つて、それを一人又は數人の住むべき所にしてあるので、家といふよりも室といふ方が寧ろ適當して居る。可笑しい事には、此町の人達はこれほど智識が進んで居りながら、男女の關係については非常な嚴格主義をとり、親子夫婦兄弟すら一つ家に住むことを許さぬ。そして成るだけ男女相見ぬやう、成るだけ相接せぬ様と勉めて居る。夫婦でも何か必要のあつた場合に

相見やうとするには、わざ〳〵外の町へ出て行かねばならぬのだ。斯やうに嚴重な制度を立て通すからは、定めて此の社會には男女の不義淫行などが跡を絶つであらうと思はれるが、事實は決して然うでない。男女の仲を隔離すればするほど、驚くべき現象を發見し得るのである。外の社會として恐らく男と男との關係、女と女との關係に、此の社會のやうな恐るべき醜事が伏在して居やうなどとは、想像にも及ばぬ事であらう。此の弊風の結果が折々殺傷の慘事を醸し出すとは驚くべきではないか。それでも此の町の人達は、自分等を純潔な人間だと思つて、男女關係などゝそんな穢らはしい行は無いと誇つて居る。自然を亡みする嚴格主義や禁慾主義は此んなものだらう。

金錢といふものは此町には無い。勞働が無賃の代り、飯料も屋賃も誰からも徴收されはしない。病氣になれば何時でもお醫者があつて藥は貰へるし、身體が汚れゝばお湯があるし、金錢といふものゝ必要が全く無いのである。只外の町から色々の物を買つたり、外の町

へ色々の物を賣つたりする場合にのみ、金錢が用ひられてゐるのだ。町内では帳簿と書付とで收支の計算さへして行けば、それで善いのである。

＊　＊　＊　＊　＊

かういふと大そう立派である。大そう善い處らしい。が、實の所、それは東京市牛込區市ヶ谷富久町百十三番地に一廓を構へて居る所の有樣だ。東京監獄の中の樣子だ。私は此處に於ける百日間の生活に於て、可笑しくも偶然理想郷に近づける此の恠物を研究し、兩性問題、犯罪者の心理、社會の趨向等に關する、多少の智識を得た。

それらに就いて、色々書いても見たく、尚ほ調べても見たいとは思つてゐるが、身體が大分疲れては居るし、本誌の編輯はモウ大へん遲れて居るし、それにチヨクく裁判に出ねばならぬし、なかく落ち付いてそんな事をやつて居られない。そこで只單に思ひ付いたばかりをチヨツと茲に書き付けて見た。よく考へて見ると、監獄以外、我々の周圍にも着々として理想が實現されつゝある。決して失望するにはあたらない。

菜食主義に就て

堺　生

菜食主義の事に關して「之を實行せんとするに當り心得べき事柄を今一層詳細に且つ具體的に示されんことを希望す、即ち如何なる種類のものを如何に調理し如何に之を實行せんかとの事に候」といふ質問があつたが、予は今之に答ふる事は出來ぬ。予の考ふる所に依れば、菜食主義の實行は禁酒禁煙などとは異なり、個人的に行ふ事は殆んど出來ぬ。故に菜食主義が若し行はれるものとしても、それは萬人が衣食住の自由を得る革命後の新社會で無ければならぬと思ふ。然し稍や富裕なる人、若しくは廣く世と交らざる人は、今日に於ても之を行ふ事が出來ぬとは限らぬ。然し食物の種類、調理の方法等に就ては、予は研究した事がないから答へる事が出來ぬ。其の邊の事は醫士にして菜食主義の研究者たる加藤時次郎君、大石祿亭君等に質問して、今後の紙上に記載する事があるかも知れぬ。殊に大石君は料理通であるから種々の方案があると思ふ。

新刊紹介

▲家庭講話（竹村修譯述）　「簡易生活」の著名ワグナーの原著「パイ、ヒ、ファイヤサイド」を譯したるもの也。譯者卷頭に曰ふ「家庭の聲は今日到る處に反響を傳ふれども研究日尚ほ淺くして長安道杳なりと謂ふべし」と、漫然家庭なる大題目を提へ來りて講話するものなるが故に誠に要領を得ざるの感あれども譯文比較的なだらかにして多くの温かみを藏す。譯者はこれによりて西洋の家庭に關する善き思想を日本に輸入せんと試みたりと稱せらる。吾人は家庭の研究および兒女教育に趣味を有する人の、少なくとも銷夏の一讀物として本書を推薦せんと欲す（四六版三二四頁價五十錢、東京本鄉駒込西片町內外出版協會發行）

▲戀愛觀（火鞭會編輯）　嘗て火鞭會が其の雜誌に掲ぐるために「戀愛に對する見解」『自由戀愛を是認すべき乎』『之を是認するとせば其の自由の範圍如何』の三問を提出して大中小三十家の解答を求めたるもの等を一冊に編輯したるもの、嘗ても評したる如く或ものは嚴めしき禁慾主義或ものは放縱なる自由主義、花とりどりに面白く、一讀すべき價値十分なり。若しそれ戀愛に關する青春の男女は徐かに此の書を讀んで、おのが心の駒の行く先を定むべき也（四六版二六五頁價三十錢、東京京橋區五郎兵衛町廿二、百藝雜誌社發行）

▲佛御前（歷史繪はがき上の卷。高村眞夫畫）　發行所が「平民」書房といふのだから、きつと安つぽいケチなものだらうと思つて見たところ、開けてビックリ玉手箱、石版十八度摺りの極彩色、シブイ高尙な出來、僕は實に氣に入つて了つた。包紙からして旣に立派なものだ。これでは爾後平民書房を改稱して「貴族書房」とでもせずばなるまい。其代り値段も安くないが確かに其價値はある（三枚一組價廿五錢、東京本鄉區弓町一丁目廿六番地平民書房發行）

▲少女（第一號六月十五日發行）　宮田暢君の主幹するところ、明治少女會の機關「日進月歩の今日、日本全國の少女が此の進步に遲れざらんが爲めに正しき淸き美しき發達を圖つて明治の少女を作り完全なる婦人を作り立派なる人を造る」目的の下に宮田君は明治少女會を設け「少女」を發刊せりといふ。評議員贊助員等に立派なる當代の名士あり、口繪の三色版も美しく、よき雜誌也（菊版六十二頁每月一回一册十錢、東京牛込區納戶町廿五番地明治少女會發行）

由分社より（部）

▲發行期日は、とうとうおくれて了ひました。これは讀者諸君に對して誠に申譯の無いことで深く御寬恕を願ひ上げます。何に致せ社中非常に取り込んで居りまして如何ともすることが出來なかつたのであります。それやこれやで先月十五日發行の筈であつた「社會主義硏究」もトウトウ今月一日發行になつて了ひました。以後本誌と共に每月一日發行と定めました。今月の埋め合せには、來月は必ず定日に發行致しませう。

▲堺兄の「婦人新論」『古山の情話』も本號に出す筈でありましたが、非常に疲れて居られるのでモウ一回休んだらばと言つたとです。事情あしからず御諒察を乞ふ。

▲三月十五日の市民大會の爲めに「兇徒聚衆」なる恐ろしき罪名を附せられ、入獄中なりし私は尙ほ公判中なるにも拘はらず、五月廿一日保釋を許され、保證金百圓を以て、兎に角一先づ歸宅することを得ました。在獄中、本誌の讀者諸君より時々なつかしき慰めの書面を得し時、私は實に言ひ知らぬ喜びを禁じなかつたのでありますます。一々御禮狀を差上げませぬが、こゝで深くお禮を申上げます。判決はいよいよ今月十三日と定まりました。

o syittete? Syakaitô no libon nano yo!

Talô—O, Hana tyan, anata wa syakaitô nano?

Hanako—Sô nano yo.

Talô—Syakaitôtte nan dalô?

Hanako—Ano ne, syakaitôtte iw no wa ne, ano—ano—yappali syakaitô nanda wa. Utyi no otottsan mo syakaitô dasyi okkasan mo syakaitô dasyi sôsyite atasyi mo syakaitô nanda wa.

Ta—Soizyâ sono akai libon wa dôiw wake nano?

Ha—Sole wa sekai zyû no hito ga minna onnasyina akai, tyôdo kono libon to onazyi yôna ilo no tyi ga olutte iw syilusyi nanda wa.

Ta—ala akasyî na. Solezyâ ano kemukusyana sôsyite makkulona kulombo demo bokla to onnasyi ilo no tyi ga al to iw no?

Ha—Sô yo. Tyittomo tyigaya syinakutte yo.

Ta—Sonnala naze kao ya kalada ga bokla to onnasyi de nain da lō?

Ha—Dôiw wake da ka syilanai kedomo ne, solya honto nano yo. Sen ni kulombo no kodomo ga Tsui ibi o kitta toki makkana—tyôdo libon mitaina (libon o sayite) makkana tyi ga deta no o atasyi mita wa.

Ta—Soledewa anata wa Indozyin demo Syinazyin demo Eskimôzyin demo minna akai tyi ga al to omow no?

Ha—Sônano yo. Dole datte tyittomo tyi no ilo wa tyigatte ya syinain da wa. Akahige dano kulombo danô to itte hedate o tsukel wake wa alya syinainda wa. Sekai zyû no otoko mo onna mo tada ningen to iw hito-ilo syika alya syinainda wa ne.

Ta—Hana tyan wa dôsyite sonna iloilo no î koto o oboeta dalô?

Ha—Otottsan ga sô itta no. Talô san no otottsan wa sô ossyalanakutte?

Ta—Bok a kitto otottsan ga wasuletelunda to omow. (Sukosyi Hanako no hô e yotte.) Sono libon wa hontoni î ilo do ne,

Ha—Talô san hosyikelya atasyi hitotsu agete yo. (Tamoto kala dasyite. Talô no mne ni sasyite. Sâ Talô san mo mô Syakaitô ni nattano yo. Atasyitatyi ga otona ni nattala Syakaitô ni tôhyôsulun da wa ne.

Ta—Hana tyan wa onna da kala tôhyô nante dekiya syinai. Tôhyô no dekil nowa otoko bakkali nanda.

Ha—Ii wa. Atasyi ga ôkik nal kolo niwa onna demo tôhyô no dekil yô ni nal kala.

Ta—Naze?

Ha—Datte okkasan ga sô ossyatte yo.

(Tsuledatte soto e del.)

ZASSHI "RŌMAJI"

HAKKŌJO (Office).

Tōky, Hongō, Higashikatamachi, 111.

ATAI, Mac-barai (Rates of subscription inadvance).

1 satsu (Single copy):—

7 sen. Yūzei (postage) $\frac{1}{2}$ sen.

1 nen (for one year):—

80 sen. Yūzei tomo (inclusive of postage).

For foreign countries per annum. I yen, inclusive of postage,

Rates of adverisement may be had on application.

ROMAJI RAN

Omoitsuita mama.

HKAO SYO.

Kondo no Katê Zassyi wa hakkô no hi ga okuleta bakali de nak, hensyû no têsai mo hanahada hukanzen de atta. Nanisyilo hizyô ni isogasyi naka de kosyilaeta no da kala asyikalaz kondo dake wa ominogasyi o negaimas.

Bok wa lôya no naka de hima ni makasete iloilo lômazyi o kenkyûsyite mita. Semmon no taika de sae mo mada kolezo to omow yôna î kangae no happyôsalete inai konnityi, bok no kangae ga yaya kimatta nodo to môsyite wa hanahada sen-etsu no syidai de al ga, lôya no 100 nityi kan ni kangaeta lômazyi no kakikata wa zatto konna hû des. R ga L ni nattali Ca ga Tya ni nattali daibu mae no kakikata to wa tyigatte kita.

Kole totemo kessyite zyibun de î to omotte manzokusyite ilu no de wa nai. Mada kono ue nimo dandan kenkyûo tsunde ikitai to omotte ilu. Mae no gô to tsugi no gô to tsuzulikata no tyigatte ilu no ni tyûisyite itadaki tai.

Esperanto to ieba kono mae syibasyiba kono zassyi ni kaita kota ga al no de tabun syokun mo donna mono ka gulai wa syitte ilassyal dalô. Kondo sono kai ga iyoiyo Tôkyô ni môkelaleta. Zyimusyo wa Kôzyimatyi ku Yûlak tyô 3 tyôme 1, Yûraksya de, waga Sakai Tosyihiko kun mo sono hyôgi-in no itinyin de al. Ottewa kikan zassyi omohakkôsyi, kyôzyu omo hazyimel to no koto. Kai-in ni nalitai kata wa o-môsyi komi ni nal ga yolosyi.

Lôya no naka de hanahada ulesyikatta no wa kono zassyi no doksya kala lômazyi no tegami o uketotta toki de atta. Bok wa kole ni mkatte hkak hkak o-lê o mosyiagetai to omow.

Lôya no naka de wa syimbun ya sêzyi ni kansul zassyi wa issai yom koto o yulusalenu. Bok no yonda zassyi wa tada kono Katê Zassyi de atta. Maitsuki no hazyime golo ni nal to zassyi no tôtyak wa zyitsuni matyidôsyikatta.

Zassyi ga tsuk to ikudo mo ikudo mo kulikaesyi kulikaesite yom. Lômazyi Lan no "tyiyo-tyan kotosyi o-ikutsn ka?" "atasyi yattsu ni natta no yo!" nado to iw omosyiloi to omotta tokolo nado wa taitê sola de oboete syimatta.

Akai Libon

J. R COLE KUN SAK
HKAO SYO YAK

Otoko no ko to onna no ko to asobô to omotte kita. Onna no ko wa akai libon o utsukusyik kakete ita ga otoko no ko wa sonna mono o motte wa inakatta.

Talô—Hana tyan ohayô. Anata no kaketel no wa taihen kilêna libon da ne.

Hanako—Talô san nanda ka kole

家庭雜誌第四卷要目

本誌代價	
一部	金十錢
六ケ月前金	五十五錢
一ケ年前金	壹圓
（何れも郵稅共）	

廣告料	
特別一頁	十圓
普通一頁	七圓

▲本誌は每月一回（一日）發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。
▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵稅を申受けます。

明治三十九年六月三十日印刷
明治三十九年七月　一日發行

東京市麴町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人　堺　利　彥
東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中　村　彌　助

發行所　東京市麴町區元園町一丁目廿七番地　分　社

大賣捌所　東上

由分社發行書籍目錄

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

- 社會主義神髓　幸德秋水著　價二十錢
- 社會民主黨建設者 ラサール　幸德秋水著　價十五錢
- 革命婦人　平民社同人編　價十二錢
- 百年後の新社會　堺利彥抄譯　價五錢
- 理想鄉　堺利彥抄譯　價五錢
- 通俗社會主義　堺利彥譯述　價二錢
- 少年叢書 目のある人　堺利彥著　價十錢
- 社會主義問答　堺利彥著　價一錢
- 社會主義の詩　由分社編　價五錢
- 社會主義の話（發賣禁止）　深尾韶著　價一錢
- 月刊 社會主義研究　堺利彥編輯　價十五錢
- 家庭雜誌合本（第二卷）價五十錢（第三卷）價八十錢

發行所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社

由分社取次販賣書籍目錄

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

- 社會主義入門　平民社同人編　價十錢
- 經濟進化論　田添鐵二著　價十五錢
- 富の壓制　西川光二郎著　價十錢
- 土地國有論　西川光二郎著　價十錢
- 消費組合の話　石川三四郎著　價十二錢
- 地上の理想國 瑞西　安部磯雄著　價十五錢
- 英國勞働界の偉人 バアンス　西川光二郎著　價五錢
- 普通撰擧の話　西川光二郎著　價一錢
- 廿世紀の怪物 帝國主義　幸德秋水著　價廿五錢
- 小說 火の柱　木下尚江著　價卅五錢
- 小說 良人の自白 上中下全三册　木下尚江著　價壹圓
- 小說 勞働問題　堺利彥譯　價卅五錢
- 家庭の新風味　堺利彥著　價壹圓
- 家庭夜話　堺利彥編　價壹圓
- 枯川隨筆　堺利彥著　價二十錢
- 言文一致 普通文　堺利彥著　價廿五錢
- 我家の犬猫　堺利彥著　價八錢
- 小品文集 牛生の墓　堺利彥著　價卅五錢
- 小品千題 智識と趣味　斯波貞吉編　價卅五錢
- 少年少女 新遊戲集　西村渚山著　價廿五錢
- 社會主義名士肖像 繪葉書　一組六枚　價十錢
- 詩集 わか草　樋口配天著　價三十錢
- 社會主義概評　島田三郎著　價三十錢
- 社會黨　西川光二郎著　價二十錢
- トルストイ翁 日露戰爭論　平民社譯　價八錢

社會主義中央機關 **光**　每月二回　一部三錢半

▲西川光次郎、山口義三の二氏、主として之を經營し、他の諸同志之を助く
▲日本社會黨々報は常に本紙上に掲載せらるべし
▲十部前金卅五錢、二十部六十五錢

取次所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社

堺利彥編輯　每月一回一日發行

社會主義研究

▲第一號　には社會黨の經典たる共產黨宣言及び其筆者マルクス、エンゲルスの傳を載す

▲第二號　にはクロポトキンの無政府主義の哲學及び之と社會主義との關係を說明す

▲第三號　には列傳体を以てサンシモン、フーリエーよりラサール、マルクスに至る社會主義の發達を叙す

▲第四號（七月一日）には紙面の全部を擧げてエンゲルスの名著『科學的社會主義』を譯載す

價一部十五錢、五部前金七十錢、十部一圓卅錢

發賣所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社

坪內逍遙　木下尚江　序　中島孤島作　（定價卅五錢　郵稅不要）

◉新刊發賣

小說 新氣運

◉好評嘖々

坪內氏の序に曰く……或は典重渾雅、或は温籍明淨、然らざれば清麗にして自然なり。辨難、批判によろしく、傳記、隨筆によろしく、美文、論說の反譯によろしく、お伽話によろしく、新體の詩歌によろしく**小說**脚本によろし。

木下氏の序に曰く……小生は社會改革と云へる立場より見て、君の行動に滿腹の敬意を表し、君の精神の新著を通じて弘く國民の意識に大反響あらんことを切に祈る次第に候。

曰く**人生問題**曰く**家庭問題**曰く**社會問題**これ現代の最大問題也、本書はトルストイ翁の思想に負ふ所多く、此問題の眞相と、解決の氣運は本書に現はる

東京本鄉元町一丁目　平民書房發行

東京麴町元園町一丁目　由分社取次

●歯科治療 自午前八時 至午後六時●

神田區須田町二十六番地

歯科醫 吉瀬才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

◎眼科診察 毎日午前◎

京橋南佐柄木町五
（電話新三四五八） 川上眼科院

外科皮膚病 梅毒 痔痳 外科的婦人科 尿道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際 出雲橋 加藤病院

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸 毎月曜午前中

產科 婦人科

横濱市眞砂町二丁目廿六番地

朝長（ともなが）鷹二郎

診察毎日午



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顏紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及ひ頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を强健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

藥價 〔二日分弱金拾錢　廿二日分(常備用)金壹圓　十日分金五拾錢　六日分金三拾錢　四日分金貳拾錢〕

本舖 東京市日本橋區藥研堀町 藥劑師 高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す

慈善券

ライオン歯磨小袋入に添付せり詳細は
實物に就き御承知あらんことを乞ふ

北米セントルイス萬國博覽會

名譽銀牌受領



發賣元
東京
小林富次郎

粉製
赤罐入
發賣

意匠嶄新且つ優美なる彩色罐入にして頗る携帶に便なり
能く香氣の發散を防止し終に至る迄本品獨有の佳香を保つを得べし
遠征の士其他旅行用に適せり
定價一箇拾貳錢

發兌元
大阪
小林支店

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店